律の兄貴やってます　～拝啓、前世の家族へ～

あなか15号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
律の兄貴やってます　～拝啓、前世の家族へ～

【Ｎコード】
Ｎ２０９１Ｔ

【作者名】
あなか１５号

【あらすじ】
けいおん！の転生物です！！
ド素人ですが、暇つぶしに読んでくれたらあなか１５号は嬉しいっす。
駄文ですが、よろしくお願いします。

一話！

初めまして、こんにちは。いきなりですが、私は二次小説でよくある転生者です。
いきなりこんなこと言われても、正直「え？何言ってのこいつ？」って思われるかもしれませんが……事実なんですよ。
それを証拠に目をつぶれば前世の記憶がありありと脳裏に焼き付くんです。

私は、三兄弟の長男でした。よく次男と喧嘩して羽交い絞めにされたり、三男にプロレス技の実験台になったり、弟たちに悪戯して仕返しにボディーブロー食らったり……

あれ？なんか弟たちにボコボコにされた記憶しかな思い浮かばない……

オホン！！と…とにかく、私は前世の記憶があるのですよ。

それに気づいたのは小学1年のころです。私が双子の妹と公園で遊ぶ約束し、先に行って待っていました。そこにはブランコに乗って本を読んでいる女の子がいました。
ちょっと昔話……

「わぁ～……」

その女の子を見た私は…僕は心を奪われました。一目ぼれとはまさにこのこと。その女の子はとても絵になっていて、僕は彼女に見とれていた。

「……ゴクリ」

話しかけようか、かけないか……僕は迷っていました。綺麗な彼女をもっと見ていたい、けど話しかけたい、そしてお友達になりたい。

「……よし！」

僕は胸をドキドキさせながら、一歩一歩彼女に近づく。けど、近づくことに不安が過る。無視されたらどうしよ……なんて話しかければいいんだろ……ちゃんと話せるのか…

こういうとき、妹は何の不安もなく話しかけることができるのだろう。アイツ、どうしてこんな時にいないんだ！！いつも可愛らしく僕の傍にいるのに！！……って僕が先に家を出てきちゃったのが原因なのだが……

「ん？」

「ひょ！！！」

彼女は僕に気づき視線を本から外し、僕を見ていた。そして目が合い、僕は思わず変な声を上げてしまう。

「……え…えっと…」

な…何か話掛けなければ！！えっと、まずはあいさつから言って、それから……そのあとは……あああ！！

って！！なんか彼女どんどん怯えた表情になってるんですけど！！怖がってる！！いきり近づいてきたから怖がってるよ！！！なにか！！なにか話しかけねば！！

「な……何の本読んでるの！！」

「ひっ！！」

しまったぁぁ！！緊張しすぎて声が大きくなっちゃったぁぁ！！そして、余計怖がらせちゃったよ！！あぁ～～、なんか小刻みに震えてるよ…なんか子リスみたいで可愛い…って僕は何を考えてるんだ！！

「ご…ごめんね！いきなり、大声だして。なんの本読んでるか気になっちゃって…」

「ヒック…うぅ…」

「ぼ…僕本好きなんだ。だから、気になりすぎて興奮しちゃって…」

「……え？……ご本……好きなの？？」

「え！……う…うん！！大好きだよ！！もう毎日読んでるよ！！」

嘘は言ってない。うん、嘘言ってない。漫画も立派な本です。

「そう…なんだ」

「うん。そうなんだ！」

ふぅ～なんとか最悪の危機は回避したみたい。怯えた顔が少しだけ和らいでいる。ちょっと嬉しそうにもみえる。

これは行けるかも。

「それで、どんな本なの？」

「うん…これだよ」

彼女は一旦本を閉じ、俺に表紙を見せてくれた。その本は絵本でタイトルは……

「『ぐりとぐらとくるりくら』？」

「うん。パパとママに初めて買ってもらったご本なの。すっごくお

もしろいの！」

彼女は嬉しそうに本を抱きしめた。それと同時に笑顔がこぼれる。なんて可愛い笑顔なんだ……

「読んだことある？」

「えっと…その本は読んだこと……？？」

あれ？？なんだろう…読んだことないのに……ものすごく見覚えある。どうしてだろう。どこで見たんだろう。

「……どうしたの？」

「え！いや、なんでもないよ…ごめん。僕その本読んだことないや」

「……そっか…」

彼女はちょっと残念そうな顔をした。そんな顔も可愛いとか思ったが……そんなことより、そんなことよりも！！このモヤモヤはなんだ！！！

どこで見た。家？妹の部屋？お父さんの部屋？教室？学校の図書室？友達の家？

「じ…じゃあ。読んでみる？面白いよ」

「んん？？……え？いいの？」

「うん！いいよ」

嬉しそうに僕に本渡す。やっぱり可愛い……じゃなくて！！

読めば何かわかるかも。そう思い、僕は本を受け取る。

絵本だけあってページ数が少ないから、すぐに読める。絵本だし、サッと。

「……」

サッと読む。そのつもりだった。

「……」

けど、僕は一文字一文字、丁寧に読んでいく。

「……」

ページをめくる度に、「この本を見たことがある」という信憑性が高くなっていく。

僕は……この本を。

「……」

僕は……俺は……

「……」

「え！！ど……どうしたの？」

俺は…

この本を知っている。そして、俺はすべてを思い出した。

「ど……どうして、泣いているの？」

「え？」

どうやらいつの間にか泣いていたらしい。そういえば、あの頃も涙

腺弱かったなぁ～～。

「だ…大丈夫？？」

「うん。大丈夫だよ！あはは、面白すぎて涙出てきちゃったよ！！」

「え？泣くほど面白かったの？？面白いと泣いちゃうの？？」

「そうだよ～。面白いと泣いちゃうんだよう！！」

すべて思い出した。あの頃の…前世の記憶を。

俺が三兄弟の長男であること。兄弟仲良かったこと。自分がゲーム・漫画・アニメが大好きだったこと。高校1年から彼女できなかったこと。現役に一流大学だけ受けまくって落ちて一浪したこと。弟2人はリア充だったこと。就職が中々できなかったこと。そして…就職決まってすぐの23歳で死んだこと。

「クスっ。面白いと泣いちゃうなんて変なの」

「ええ～そうかなぁ～？」

「フフっ」

やべ～～やっぱ笑うとめっちゃ可愛い。ちょっとシリアスな展開だったけど、そんなのどうでもよくなるくらい可愛い。前世のことを考えるとなんか変態っぽいけど、そんなのどうでもいい。前世もなかなかの変態だったからな。ロリじゃなかったけど…

「そんなに面白かったのなら、そのご本貸してあげるよ」

「え？けど、この本大切なものなんでしょ？？」

「うん。そうだよ」

「んじゃ～駄目だよ。大切なものを他人に貸しちゃだめなんだよ？」

「え？そうなの？」

「そうなの」

大切なものは、大切に自分で持っておかないと。

「それじゃ、また明日今度は違う本持ってくるね！まだ面白いご本いっぱいあるから！」

ワクワクとした表情で言った。ついさっきまで怯えていたのに。

「わかった！それじゃ明日同じ時間で公園に待ち合わせね！！」

「うん！！」

彼女はブランコから降り、「またね」と言って公園の出口へ向かった。

出口で彼女はこちらに振り返り、笑顔で手を振ってくれた。俺もそれを笑顔で手を振ってかえした。彼女は満足した表情で公園から出て行った。

「ふぅ～」

俺は小さく息を吐く。

まさか、自分が前世の記憶を持っていたなんて。てか、こういうのって死んだときに神様が出てきて「ごめん。ミスって殺しちゃった」というのじゃないの？？そしてチートな能力を2～3個もらって、原作ブレイク！！とかやっちゃうだと思ったんだけど…

「てか、俺って結構冷静だな…。前世の記憶があるって中々怖いはずなのに…」

まぁ～思い出したときは胸の中がこみあげてくるものを感じましたよ。泣いちゃったし。てか、大声で泣きたかった。

『お～い！！にぃ～ちゃ～ん！！』
「ん？」

どうやら我が妹が来たようだ。いつも元気な妹だ。まるで前世の弟たちみたいだな。
……あいつら、元気かな

「兄ちゃん！どうして先行くんだよ！！待っててって言ったじゃん！！」
「先に行って遊び場所を取っておこうと思ったんだよ」

ホントはお前を脅かそうとしたんだけどね。

「え？そうなの？…って兄ちゃん、目赤いよ？？どうしたの？」
「フ…過去を振り返ってたのさ」
「何言っての？兄ちゃん？？」
「そんなことより！！我が妹よ！！！何して遊ぶ！！！」
「えっとねぇ！！えっとねぇ～～！！！」

俺と妹はお母さんが迎えに来るまで、ちょ～遊んだ！！
怒られたけど……

とまぁ、こんな感じで前世の記憶を思い出したわけです。
そのあといろいろ戸惑いはありましたが、楽しく現世を過ごしています。あの可愛い女の子とはなぜか妹と一緒に家に現れ、びっくりドッキリしたり（なんか無理やり連れてこられたらしい）、実は同じ学校の子だったり、僕を女の子と勘違いしたり（確かに妹と似てるけどさ、双子だし）、彼女が作文発表するのが嫌で公園で僕に泣

きついてきたり（あれはキュン死ぬかと思った）、その作文がメルヘンチックだったり、妹が彼女に相手に舐められないための秘訣を教えたり……中学に入ってからは3人でお花見したり、お祭りいったり、花火したり、映画行ったり、そうそう！妹がバンドやろうなんて言い出したり、3人同じ高校しようと一緒に高校選びをし、妹が必死に勉強したり、俺と彼女は勉強を教えたり……そして見事3人同じ高校に合格しお互い喜び合ったりした。

「ふんふふんふ～ん♪」

俺は鼻歌を歌いながら、愛用のギター・ＥＳＰ（ホライズンシリーズ）のメンテナスをしている。

高かったんだよねぇ～これ……めっちゃ高かった。死ぬほど金貯めましたマジで。欲しいものを我慢して我慢して……うぅ～～！！ホントつらかった！！

「よし！！完璧！！！」

メンテナス完了。新品みたいに綺麗だ。もうあれだね、メンテはプロレベル行ってるね。

あ、ちなみにギターのレベルも相当いってますよ？自分で言うのなんですが、めちゃ上手いですよ。キラン！！

「兄貴ぃ～～～！！もう行くよぉ～！！」

おっと、我が妹が呼んでるぜ。入学式早々、遅刻するわけにいかないな。

「じゃな、相棒。行ってくるぜ！！」

愛用のギターに一言行って部屋をでる。この光景を見たら「ちょっとお前変じゃね？」的に思われかねないが、自分の部屋だから問題なし！！！

「今日から高校かぁ～」

前世を合わせると2回目の高校生活。

「悪い。待たせた」
「まったく、遅刻したらどうするんだよ、兄貴」
「また、ギターのメンテナスしてたんだろ？慶はホントにギター大切にしてるよな」
「当たり前だろ～、アイツは俺の相棒なんだからな！大切にしないわけないよ」

前世の高校生活は最高に楽しかった。だから、ここでも…

「んじゃ、ギターオタクも来たことだし行きますか」
「クスッ、そうだな」
「おいおい、なんだよギターオタクって……」

俺の前を歩き出す2人。

「あ、そうだ二人とも」
「ん？」
「なに？」

俺は思い出したように前を歩く2人を呼び止め、そして言った。

「楽しい高校生活にしようぜ！！律！澪！」

「ああ～そうだな！」
「あったりまえじゃん！！3人いればいつだって楽しいって！！」
俺は二人の間に入り、並んで歩き出す。
いつも元気な双子の妹、田井中律。
幼馴染にして俺の初恋の相手、秋山澪。（現在もホの字です）
そして、俺
前世の記憶を持ち、『けいおん！』の世界の転生者、田井中慶。

「さてさて、放課後のティータイムが楽しみですなぁ～」

「ん？何か言ったか？兄貴？」
「放課後が何？」

「いや、放課後にドーナツ食べたいなぁ～って思ってさ」
「好きだねぇ～ドーナツ」
「クスッ。じゃ～いつもの放課後にドーナツ屋行こうよ」
「「賛成！！」」

そういって俺たち三人は笑い出す。
これから楽しいことがあると思うと、俺たちは笑わずにはいられなかった。

一話！（後書き）

できたら感想などいただけると嬉しいっす。

二話！！

どもども、「けいおん！」の世界に転生し、田井中律の双子の兄として生を受けた田井中慶です。最近、原作知識は日が経つことに曖昧になります…

共学となった桜ヶ丘高校の入学式。現在、クラス表を双子の妹の律と幼馴染兼絶賛ホの字の澪と3人で見ている。

「えっと…おれはっと…」

「あ！！あった！！」

「え？どこ？」

「ホラ、あそこ！」

「あ、私も同じクラスだ」

「また3人一緒だな！！」

確か小2から3人一緒だな。律は小1のころから澪と一緒だったけど……

「なんかここまで3人一緒だと仕込まれている感じがするな…」

「クスッ、確かに」

「いいじゃんか。さ！行こうぜぇ～！！」

律の一言で俺たちは自分のクラスへと向かう。しっかし…

女子ばっかだなぁ～。いくら去年まで女子高だからといっても男子が少ない気が…てか俺しかいなくね？

「何キョロキョロしてるんだ？慶？」

「ん？いや……」

「どうせ、『かわいい子いねぇ～かぁ～。ぐへへへ』って具合に探

ってたんだろ??」
「おい…お前は実の兄を変態に仕立てたいのか……」
「はっはっはぁ〜!そうだよなぁ〜兄貴はみ…（ガシッ!!）イタイイタイ!!!」
「あまり調子に乗るなよ?」
「ごめん!!ごめんなさい!!!許してぇ〜〜!!」

ったくこのバカ。

「イテテ……兄貴のバカ力…」
「慶は相変わらず力強いな。腕は女の子みたいに細いのに」
「まぁ〜一応男だからな」

筋トレもしてるからな。腕立ても腹筋も毎日１００回してるから筋肉はかなり発達しているハズ……なんだけど、なぜか腕が細い……まったく太くなる気配がない。てか華奢だ。だから、小学生のころは舐められたもんだ。『女男!』ってよくからかわれたな。

「で?どうしてキョロキョロしてたんだ?」
「あぁ〜、なんか男子が俺以外見当たらないと思ってさ」
「「男子??」」

そういって2人はあたりを見渡す。

「確かに…」
「あれじゃないか?もう教室にいるとか?」
「もしかして兄貴しかいないとか?」
「いや、さすがにそれは……」

去年まで女子高だぜ??女の子いっぱいだぜ??女子目当てで入学

してくる男子がいてもおかしくないハズ。桜ヶ丘女子は結構可愛い子集まる学校で有名だったからな。
それかどっかの生徒会副会長みたいに家から近いからとか？
けど偏差値が結構高いからな。入りにくいのは否めない。否めないが、それでも最低１０人はいるハズ。
フッ…俺の読みはよく当たるんだぜ？？伊達に将棋初段は持ってないぜ！！

「……先生……もう一度言ってください」
「えぇ～。男子は田井中君だけです」

んなアホなぁ～～！！！俺一人！？何！！何すか、この展開！！！
共学の高校に男子一人って……どこのＩＳ学園ですか！！！

「ホ…ホントに俺一人なんですか？」
「ええ～。願書は田井中君以外に２０人弱いたんですが、田井中君以外みんな合格点に届かなかったんですよ」

……わお

「あの～それっていろいろまずくないですか？」
「大丈夫ですよ。なんとかなります。それに田井中君女の子みたいですし……」

俺は女の子みたいだけど、正真正銘男だからね！！！それじゃなにか！！女装しろってか！！男やめろってか！！！

「（女の子みたいだって…ぷぷぷ）」

律…てめぇ～あとでデコピンな…

「それじゃ入学式が始まりますから講堂に移動しますよ」

ちなみに俺の担任は優しそうなおばあちゃん先生の女神山（めがみやま）　月（つき）先生です。年寄ながら、古風ある美しさを兼ね備えていて、桜高女教師の「三人天女」の筆頭で、その美しさと優しさから教師からも生徒からも大変人気がある。

「軽音部見に行こうぜ！！」

「……でかい声だすな……」

「なんだ？兄貴まだ女の子みたいって言われたこと気にしてるのか？？」

……うるせぇ～

「ホラ！元気出して！気を取り直して軽音部見に行こう！！」

「わかったよ……行くよ……」

「よし！！澪も誘うぞ！！！」

「澪ぉ～～！！！軽音部行こうぜ！！」

「え？軽音部？」

「そそ！」

「……慶も行くの？」

「まぁ～な。俺ギター弾けるし」
「澪もベースできるだろ！だから行こうぜ！！」
「えっと…私、もぉ～入部届に文芸部って書いちゃったし…」
ホラっと言って俺たちに入部届を見せる。ふむ、確かに書いてるな。
「えっと…だからさ、よかったら慶も文芸部にしないか？」
「ん？」
「ホラ、慶も本好きだろ？きっと文芸部も慶に合うと思うよ。……
そ、それに私、慶の書いた小説また読みたいし…」
「澪……」
澪と二人で……文芸部……　≪絶賛慶は妄想中≫　……
いい！！すごくいい！！
律には悪いがここは澪と文芸部に！！
……ん？律？澪の入部届を穴が開くほど見てどうした？そんなに
ショックだったか？？
「ど…どうだろう？」
「ああ、悪くないな」
「よかった！！んじゃさっそく入部届を……」
“ビリ～～～”
「「あぁ～～～～！！！」」
「よぉ～～し！！軽音部に行くぞぉ～～！！！」
「「り～～つ～～～～！！！」」

「え？廃部？」
「正確には廃部寸前ね」

あの後、取り敢えず律に拳骨を食らわせてから、軽音部の詳細を職員室で山中さわ子先生に聞いていた。
ちなみに山中さわ子先生も桜高女教師「三人天女」の一人です。

「昨年度までいた部員はみんな卒業しちゃって今月中に5人入部しないと廃部になっちゃうの」

あれ？5人だっけ？4人じゃね～の？？

「それじゃ、がんばってね」

と言ってさわちゃん先生は去って行った。

「……」
「きれいな先生だったなぁ～」
「さすがは桜高『三人天女』の一人だな」

チラッと律を見ると目が点な状態……
まぁ～入りたかった部活がないって結構ショックだからな…

「でも、廃部なら仕方ないな、私と慶は文芸部に…」
「そうだな」

律には悪いがここは諦めてもらうしか……

“むんず”

「「り…りつ？」」

「誰もいないってことは今入部すれば私が部長……悪くないな」（ニヤリ）

「「……」」

拝啓～前世の家族へ～

これから部員探しです……。

二話！！（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございます。感想、アドバイスなどいただけるとあなか１５号は嬉しいです。

三話！！！（前書き）

短いですが、お願いします。

三話！！！

「あの～見学したいんですけど…」
「軽音部の！！」

音楽室で律が「入部希望者を待つ！！」という何とも受け身な宣言してすぐのこと…
おっとりしてとても可愛らしい女の子が入ってきた。
ふむ…澪と同等のレベルの高い子が現れたもんだ。とくに沢庵型の眉毛がなんとも可愛らしい。……確か…えっと…むっちゃんだっけ？麦吹　琴だっけ？あれ？なんか違うような…

「いえ、合唱部の……」
「軽音部に入りませんか？今部員が少なくて……」

おいおい、そんなに強引にやると…澪に…

「コラ！！」

怒られるぞ？

「そんな強引な勧誘したら迷惑だろ！！」
「そうそう。ちゃんと相手の気持ちも考えないと」
「うぅ～～～（泣）」
「それじゃ私も行くから。慶、行こ？」
「ん？ああ」

「澪！！兄貴！！！」

んだよ？

「あのときの…あの時の約束は嘘だったのか！？」

「「……」」

「あたしがドラムで、澪がベースで、兄貴がギターで……ずっとずっとバンド組もうって！！」

「「……」」

「まぁ～…」

「三人でライブに行ったあの日……」

なんか律がウルウル声で語り始める。それにむっちゃん（仮）が悲しそうな表情で律の話を聞いている。

ああ～うん……なんか映画の感動のワンシーンみたいだけどさ…

「あの時の言葉は嘘だったのか！！」

「「その回想が嘘だ…」」

「あれ？そうだっけ？？」

それって律の部屋で見たライブビデオのこと言ってんだろ？？それを見て感化された律が……

「律が強引に…」

「うんうん」

「澪も兄貴もやるっていったじゃん」

「そうだけど…」

「それでプロになったらギャラは７：３：０ねって」

「捏造すなッ」

「その０っておれか？おい」

お前は俺を奴隷にしたいのか…

「ぷッ…くすくす…」
「「「ん？」」」
「なんだか楽しそうですね。キーボードぐらいしかできませんけど、私でよければ入部させてください」

ぱぁ～っと律の顔が明るくなる。澪はちょっと信じられないって顔をしてる。俺は…たぶん普通だ。

「ありがとー！！これであと一人だ！！」
「私たちはもう人数に入ってるのね」
「ホントにありがとー！！えっと…」
「私、琴吹紬です」
「あたしはドラムの田井中律。こっちはベースの秋山澪」
「よろしく」
「んで、こっちはギターであたしの兄貴の田井中慶」
「よろしくな、琴吹さん。（そっか、琴吹紬か…）」
「まぁ～やっぱりお兄さんなんですね。兄貴、兄貴って言ってたからあだ名にしては変だなって思ってたんです。もしかして、双子ですか？？」
「あぁ～、一卵性の双子だ」
「まぁ～／／／／わたし、双子の人初めて見ました。ホントそっくりですね！！」

まぁ～双子だからねぇ。俺もカチューシャしたら律になるからな。

「あの！握手してください！！」
「え？……いいけど…」
「キャッ／／／／」

スゲ～嬉しそうに俺に握手を求める琴吹さん。
あ、手…やわらかい…

「よぉ～～し！！あと一人集めるぞぉ～～！！」
「バンドとしてはこのメンバーでできるけどね」
「パートはどうしよっか、兄貴」
「ん～～」

俺的には音の幅を広げたいから、ベースを増やしてツインベースか。
いやバイオリンなんか入れても面白いかもしれん…サックスフォン
……コントラバス……ボイスパーカッション……カスタネットも捨
てがたいが……うん。でもやはり…

「ギターだろ」

拝啓～前世の家族へ～

琴吹紬が仲間になりました！！

三話！！！（後書き）

一度はやってみたかったオリ主紹介！！

プロフィール

田井中　慶

性別・男

身長・１６５ｃｍ

体重・４７ｋｇ

誕生日・８月２１日

好きなもの・秋山澪、妹の律、弟の聡、軽音部のメンバー、ギター、甘い物

嫌いなもの・納豆、ホラー映画、律と澪と聡をいじめる輩、

特技＆趣味・将棋（初段）、スケッチ、小説執筆、作詞作曲、サッカー観戦、

料理、

人物

けいおんの大ファン。前世の記憶を持つ転生者。しかし、年が経つごとに前世のことと「けいおん！」のストーリーがかなり曖昧になってきている。小１のころに公園で少女（澪）と出会いで、前世の

記憶を思い出す。それと同時に少女に一目ぼれ。（その少女が秋山澪と知り、めっちゃ喜ぶ）

律とは一卵性の双子。

文武両道ともにかなりのチートぶりを発揮。すべて得意科目で、特に得意なのが英語・国語・数学である。英語はペラペラ。ドイツ語もそれなりに話せる。

ギターの腕はプロも認めるほど（実際まだ認められていないが）。将棋もアマチュアではかなりの上位レベル。料理もかなりの腕前。律の料理も慶が教えた。甘い物には目がない甘党。甘いものを奪われると、海底火山が爆発。

妹の律、弟の聡を大切、もとい溺愛している。そして澪を心から愛している……がめったに表に出さない。

女装がかなり似合う。律がよく女装させようとするが、毎回拒否している。…が内心別に嫌と思っていない。なぜなら似合っているから。

四話！！！！（前書き）

一卵性のことですが……まことに勝手ながら、あなか１５号はこのままでいこうと思います。

四話！！！！

琴吹紬が軽音部（仮）に入部して、一週間が経過した。

「んん～～～！！ケーキおいしい！！」
「この紅茶…相変わらずいい香りだな」
「うふふ。紅茶のおかわりいかがですか？ケーくん」
「あ、もらうよ。ありがと、紬」
「あ、ちょっと兄貴のケーキ一口頂戴？」
「ああ、いいぞ。だが、俺が先に食ってからな。そして、お前の一口くれ」

紬は毎回ケーキに紅茶を自前で持ってきてくれる。もらい物らしいが、毎日のように貰えるので食べきれないらしい。見た目お嬢様だったが、どうやら本物のお嬢様らしい。
そのケーキも紅茶も美味いんだなぁ～これが！！甘党の俺にとってはこのティータイムはまさに祝福の時だ。
……ん？

「どうした、澪？ケーキ食べないのか？」
「もしかし、好きなケーキじゃなかった？澪ちゃん」
「いらないならあたしが貰っちゃうぞぉ～」
「待て我が妹よ。ここは平等に半分に分けよう」

“ガタッ”

……っといきなり澪が椅子から立ち上がる。
あれか？トイレか？いや……違うな、この表情は……

「呑気お茶してるなぁ～～～～～！！！」

……お怒りでした。

「あれから一週間！！何もしないで毎日毎日お茶して！！あと一人入部しないと軽音部は廃部なんだぞ！！ちょっとは危機感持ちなさい！！」

「えっと……」

「えっとじゃない！！慶も！！」

「し…しかしだな、紬のケーキと紅茶がおいしくて…」

「ケーくん、紅茶のおかわりどう？」

「いただきます」

「コラ！！！」

うぅ～久しぶりに澪に怒られちゃったよ。

「や～い、怒られてやんの」

「お前も…だ！！」

「イデ！！」

「クススッ」

澪に拳骨を食らう律。その光景を見て微笑む紬。うん、笑い方してマジでお嬢様だな。笑い方にも品があるぜ……今度絵のモデルなってもらおう。

「でも、澪の言うとおりだな。何か策を練らないと、このままだと廃部は確実だな」

「そうだろ？だからお茶なんてしてる場合じゃないんだよ」

「ああ、そうだな。ありがとな、澪。おかげで目が覚めたよ」

「え…！う、うん。どういたしまして／／／」

さてさて、どうするか……

「何か案がある人いるか？」

「はい！！兄貴副部長！！」

「はい、律」

「部長はあたしだから、兄貴よりあたしが仕切ったほうがいいと思います！！」

「黙ってろ」

「……すいません」

「はい！ケーくん副部長！！」

「はい、紬」

「チラシを学内掲示板に張るのはどうでしょう！」

「慶副部長、私もムギの案に賛成です」

「あたしもそれがいいと思いまぁ～す！！かっこいいイラスト描いて張ればきっと軽音部に興味を持ってくれるはずだと思います！！」

ふむ…確かにチラシを張るのはいい案、てか妥当な案だが…

「だがチラシだけじゃだめだ」

「え？」

「どうして？」

「入部届が配られて一週間がたつ。入部期間は今月までまだ時間があるが、大半の生徒は三日以内には部活に入るか入らないか決め、そして入る生徒はもうすでに希望する部活に入部しているハズだ。現に律も澪も紬も三日以内にはどの部活入ろうか決めていただろ？」

「確かに…」

「その通りです」

「よって、俺たちがターゲットにするのは部活に入らない生徒、帰宅部だ。だが、帰宅部の生徒はそもそも部活に興味がない。チラシ

を張っても何ら興味を示さない。中には例がいるだろうから、チラシの効果が0とは言わないが……効果は薄いだろう。だから、チラシとはまた別に行動を起こす必要がある」
「おお～！！すごい説得力だわ！！ケーくん！！」
「さすが慶だな！！」
「あたしの兄貴だけあるな」（モグモグ）

フッ……3人が尊敬のまなざしで見てくるぜ。これぞ転生者が成せる器。
だてに転生してないぜ！！あんま前世の記憶ないけど……

「んで？別の方法ってどうするんだ？兄貴」（モグモグ）
「それをこれから話し合って決めて……」
「……ん？」（モグモグ）
「なぁ～……律」
「何？兄貴」
「……何……食べてるの？」
「？？ケーキだけど？？」
「それは見てわかる……誰のケーキだ……」
「兄貴のだけど？」（モグモグ）
「……なぜ俺のケーキを食べる」
「いつまでも食べないからいらないのかなぁ～って思って」
「……そうか」
「うん。（モグモグ）あ、このクリーム、ラズベリーの味がする」

まったくウチの妹は、人が話してる最中に物たべるなんて。人が真剣に話してるのに。幸せそうに食べやがって……まッ、律らしいし別にいいか。……おいおい、澪。何をそんなに不安そうに俺をみてるんだ？　別に俺が楽しみにとっておいたケーキを勝手に食べたからと言って、俺が怒る訳ないだろ？俺は律の兄で、転生者だぜ？心

は海より広いぜ？荒れることはないさ。

……海底火山は爆発するけどね。

「何がラズベリーの味だコラ！！！人のケーキを勝手に食いやがって！！！てめぇ～～の頭をラズベリー色に染めてやろうか！！」
「ひぇ～～～～～～～！！！！ごめんなさい、兄ちゃん！！」
「謝っても許されねぇ～～～！！！！それが甘い物の恨みだ！！！！」
「け、慶！！お、落ち着け！！」
「兄妹のとの戯れ／／／／……ドント来いです！！」
「変なこと言ってないで、ムギも慶を止めるの手伝って！！」
「え！！私も手伝っていいの！！」
「なぜ嬉しそう！！」

拝啓〜前世の家族へ〜

結局…チラシ以外決まりませんでした。

四話！！！！（後書き）

一度はやってみたかったオリ主紹介パート２！！＆用語解説！！

女神山　月

年齢・５７歳

性別・女

身長・１６２ｃｍ

体重・？？？ｋｇ

好きなもの・勉強教えること、おしゃべり、お茶

嫌いなもの・特になし

趣味＆特技・合気道、将棋、囲碁、俳句

詳細

桜ヶ丘高校の教師。担当教科は国語。桜高の「三人天女」の一人。
田井中兄妹、秋山澪の担任の先生。
優しさあり、美しさあり、気品さありと高齢になっても変わらない。
枯れることのない桜高の華。

女性版金八先生っと言ってもいいほど、生徒からも教師からも大変
好かれている。彼女を見て「教師になろう」と思う生徒は数えしれ

ず。

未婚者。

なんでも彼女が若いころ「高嶺の花、というより天界の女神」とまで言われるほどであり、誰も手が出なかったらしい。（本物の女神ではないかという話もあるくらい……）

そして、彼女自身恋愛の関心が皆無であった。

度々、慶と将棋を打っている。その腕前はアマチュア上位レベルの慶が「勝てる気がしない」「盤の上で遊ばれている」と言わせるほど。

三人天女

桜ヶ丘高校で人気があり、なおかつ美しさを兼ね備えた女教師に与えられる称号。

女神山先生が赴任した当時、女神山先生のほかに2人の美女教師がいた。そのとき当時の校長が「まるで天女のようだ」と彼女たちを紹介したことが始まりである。なお、女神山先生は一度も「三人天女」から外れたことはない。

現在の「三人天女」

女神山　月

山中　さわ子

？？？？（数学の先生）

五話！！！！！

あれから更に一週間が経った。一週間もあればいろいろ案が出てきそうだが……

『やっぱりゲリラライブでしょ！！』
『何がやっぱりだ。お前は軽音部を永久消滅させたいのか』
『だって兄貴が別の方法でやろうって言ったじゃん』
『だからってゲリラライブは……』
『じゃぁ～お茶会なんてどうかしら？』
『いや、ここ軽音部だから……』
『人は来るかもな……』

……とか

『兄貴が女装して単独ライブ！！』
『……しねぇ～よ』
『とか言いつつ、女装するの嫌じゃないくせに』（ニヤニヤ）
『……』
『ケーくんの女装……ドント来いです！！』
『ムギ……』

……とか

『……兄貴のメイド姿…』
『次言ったらデコピンな』
『ひッ！！』
『りっちゃん、すごく怯えてるけど……』
『……慶のデコピンはタンコブできるからな……』

……とか

『澪がメイドで……』

『やらないよ！！』

……とまぁ～そんな具合であっという間に一週間が経った訳ですよ。

澪のメイド姿……見てみたいぜ。

「はぁ！入部希望者が現れた！！」

「そうなんだ！！さっき山中先生が来て教えてくれたんだ！！」

「これで廃部は回避できるな！！兄貴！！」

「本当、よかったですね！！」

嬉しそうに3人は笑う。よほど嬉しいのか、さっきから俺の足を踏んでるのに気が付いていない……

……だが、こんな時期に入部希望者が現れるとは……

よほどポワポワしている子に違いないな。

違いないが、どんな人であれ軽音部に入ってくれるんだ。俺も嬉しいわけがない。

「んで？誰なんだ？入部してくれる子って」

「１－３の平沢唯さんだよ」

「きっとこんな時期に入部してくるってことは相当ギター上手いはずだ」

「おいおい、勝手に妄想するなよ」
「ちっちっち、分かってないなぁ～、澪は！真の実力者とは……どんな時でも遅れてやってくるものなのさ！！！」
「そうなの！りっちゃん！！」

……またこいつは…何言ってるんだ（汗）そして紬も信じるな。律が調子に……

「そうだぞ、ムギ！！それを証拠に見ろ！！兄貴はいつも遅れて部室にやって来るだろ！！」
「はッ！！……そうだったのね……ケーくんがいつも遅れてくるのはケーくんが真の実力者だからだったからなのね！！」
「えっと……紬さん？」
「そうだったのか、慶！！いつも私が一緒に行こうって誘っても『先行ってて』って言うのはそういう意味だったのか！！」

……澪まで乗せられた！！

「きっとギターの腕前は慶と同じくらいかもな！！」
「いや、ここまでの遅れての登場……もしかすると兄貴より上手いかもしれない！！」
「け…ケーくんより上手い…」
「慶以上……はッ！！も…もしそんなことになったら……相当すごいバンドになるぞ！！」

俺を残して三人のテンションがヒートアップ。
話がどんどん膨れ上がっている。

「よぉ～し！！平沢さんを失望させないために気合いれていくぞぉ～！！」

「「お〜！！」」
「……」
「なんだなんだ、兄貴！！そんなじゃギタリストレベルの差がどんどん開いていっちゃうぞ！！」
なんかすでに抜かれてる！！あってもいないのに！！平沢さんにあってもいないのに！！
「そうだぞ！慶！！」
「そうよ！ケーくん！！」
……ったくこの子らは……。

「……ギター、練習しとこ」

先に言っておく。律の言ったことを気にしてるとか、そんなんじゃないから。全然違うから。
……うん、断じて違うから！！失望させたらどうしようとか、抜かれてたらどうしようとか思ってもいないから！！

「みんな入部希望者が来たぞぉ～～～～！！」
「本当か！」
「わぁ～～！」

音楽室の扉が開くと同時に律が来た。その後ろには入部希望者、おそらく平沢唯さんが律の手に引かれてやってくる。
つ……ついに来た…噂のギタリスト平沢唯！！見た目的にギターが上手そうに見えない、……だが、人を見た目で判断してはならない。それが俺の前世でのモットーだった。……たぶん。

「ようこそ、軽音部へ！！」
「歓迎いたしますわぁ～！！」
「あ…えっと、その…」
「よし！ムギ！！お茶の準備だ！！」
「はいッ！！」

大丈夫…俺ならできる…きっとできる。

「ん？どうした？慶？」
「…主人公が強敵に挑むときって…こういう感じなのかなって思ってさ」
「ん？？？」

「……実は私たちも今年の新入部員なんだけど……」
「先輩たちがみんな卒業しちゃってて、今部員が私たち４人だけなんだ……」
「部員５人いないとクラブとして認められなくて、一週間以内にあ

と一人集まらなかったら、廃部になるところだったんです！！」
「本当に入部してくれてありがとう！！！」
「ぁ・・・・・・あの・・・・その」
「平沢さんって慶と同じくらいギター上手いだろ??憧れてるギタリストは?」

うむ……俺もそれは気になるな。同じ憧れのギタリストだったら会話も弾む。

「えっと……じっじっじっじ」
「ジミ・ヘンドリックス！！」
「おおぉ～！！」
「いえ、じっじっじっじ」
「ジミー・ペイジ！！」
「ちがっ…じっじっじっじ…」
「ジェフ・ベック！！」

な…なんてこった…ジェフ・ベックだと……

「そっかぁ～ジェフ・ベックか！！」
「どなた?」
「ロックギタリストには二種類しかいなんだ」
「……ジェフ・ベックとジェフ・ベック以外の二種類。常に新しいサウンドを追及する挑戦的なギタリスト。世界最高のギタリストの一人だ」
「ケーくんとどっちが上手いの??」
「紬よ。俺とジェフ・ベックを比べてはならない…俺が人間だったら、ジェフ・ベックは全知全能の神と言っていい」
「まぁ～～！！そんなに！！」

全知全能は言いすぎかもしれんが……

「渋いねぇ～、平沢さん！！ところで……」

「あの！！」

「「「ん？」」」

「あのッ！！申し訳ないんですけど！実は入部するのやめさせてください って言いに来ました！！」

“ピシッ”

その一言で、俺たちは……部屋が凍りつくのを感じとった。

拝啓～前世の家族へ～

まだまだ、危機は続きそうです…

五話！！！！！（後書き）

ご指摘がありました、一卵性の件です。

前回は説明不十分で申し訳ありません。

私も一卵性のことを軽く調べたのですが、異性の一卵性になる可能性は０％ではなく、極々稀にできる。っということでした。「可能性が０でないのなら」っと思い、物語にも支障がないと考えたので、このまま進行しようと判断しました。

何卒ご了承いただけますよう、深くお願い申し上げます。

また、説明を省いてしまい、それによって不快に感じてしまった方に深くお詫び申し上げます。

まことに申し訳ございませんでした。

これからも素人ながら頑張って書き続けたいと思いますので、「律の兄貴やってます　～拝啓、前世の家族へ～」をよろしくお願い致します。

あなか１５号

六話！！！！！！

「さぁ～行くぞ～！！」

今回、平沢さんが軽音部に訪れたのは、入部を取り消すためであった。どうやらもっと違う楽器を弾くと思っていたらしい。当然ギターも弾けないとのこと。（カスタネットとか似合いそう）

やっぱり「超上手いギタリスト平沢唯」は律たちの妄想だけであった。

………言っておくが、別にホッとしたとかそんなことないぞ？うん。

だが、そうなるとかなり困ったことになる。平沢さんが入部しないと軽音部は廃部になってしまう。たとえギターが弾けなくとも、入部はしてほしかった。

（（（（何とか引き留めないと））））

この時、軽音部は一つになった！！

『毎日一緒にお菓子を食べましょう』

『なにか主旨が違ってきて……アテッ！！』

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・

『ゴロゴロしてていいから！！』

『もっとおいしいお菓子持ってきますから！！』

っと言った具合に律たちが必死に引き留めていたが、

『ごめんなさい。軽い気持ちで入部するなんて書いたから…期待させるだけさせて……なんて謝ったらいいかぁ～』っと言って泣いてしまった。

その一言で律たちは黙ってしまった。

（マジで女装して路上ライブやるしかないか？てか俺の女装で人来るか？？？）

……このまま帰すのは…やっぱ両方とも気分悪いな……

『なぁ～せっかく来たんだから、俺たちの演奏聞いて行かないか？』

『え？演奏してくれるの！』

というわけで俺たちは平沢さんのために一曲演奏することになった。

曲名、「翼をください」ロックアレンジ。

「ワン、ツー、スリー、フォー！」

ちなみに俺がギターボーカルです。

“パチパチパチパチ”

演奏が終わり、平沢さんが拍手で応えてくれる。

「どうだった！？あたしたちの演奏！！」

「あの、なんていうか…すごく言葉にし難いんですけど……」

「うんうん」

「あんまり上手くないですね！！」

（（（（バッサリだ〜〜〜！））））
（ぐはッ！！）

やっべ……俺の胸に風穴あいたぜ…。そ、そりゃ〜まだ全体はそんなに合っていないけど……律もドラムちょっと走ってるし、澪はかなり上手いんだけど、恥ずかしがり屋な性格のせいでベース音があんまり響いてないってのがあるけどさ……（紬は問題なし）
俺？俺は超完璧……ではないかもな……
……まさかそこを見破ったのか？？素人なりに……

「でもなんだか楽しそう雰囲気が伝わって来ました」
「「「え？」」」
「ん？」
「私、この部に入部します！！」

“ぷに”“ぷに”“ぷぅ〜に”

なんと！！入部してくれるとは！！演奏してみるもんだ！！……
ところで律に澪よ。気持ちはわかるが人の頬で夢かどうか確かめるな。そして紬よ。引っ張るところがないからって耳を引っ張るな。お前が一番痛い。

「ばんざ〜い！！」
「ワぁ〜！！」
「やったぁ〜！！」

まぁ〜どうであれ、軽音部の廃部は回避できたな。

「それじゃ、軽音部活動記念に写真撮ろう！！」
「あ、それ私のカメラ」

「気にしない、気にしない！よし、撮るよう！！」
“パシャ”

「あ、でも私、全然楽器できないし……あっ！！マネージャーとかどうかな！？」
「いや、運動部じゃないんだし……」
「これを機にギターを始めたらどうかしら？？」
「でも、すごく難しそうな……」
「大丈夫だよ。兄貴が教えてくれるからさ」
「……そうだね！さっきの演奏聞いてたら、私にもできるかもって思ってきた！」
「……そりゃ～よかった」
「ぐはッ！！」
「だ…大丈夫か！！慶！！」

……翌日、昼休み

「そうですか、廃部は回避できたんですか。それはよかったですね」
“パチッ”
「はい、おかげさまで」“パチッ”
「去年の文化祭ライブが最後になるかと思ったんですが……どうやら、あと三年は大丈夫そうですねぇ～」“パチッ”
「女神山先生ってロックとか好きなんですか？？」“パチッ”

「変ですか？」“パチッ”
「（うッ……そうくるかぁ～普通）……いえ、ちょっと意外だなぁ～っと」“パチッ”
「ふふッ、そうですか。おや？そうきますか……けど、はい以下詰みです」“パチッ”
「な！！」
「まだまだですねぇ～、田井中君」
「クッソぉ～～」
「ふふふッ」

“キーンコーンカーコーン”

「おや？もう昼休みが終わりですか？時間が経つのは早いですねぇ～」
「将棋やってたらあっという間ですよ。では先生、失礼します」
「あ、田井中君」
「はい？」
「軽音部。最後まで後悔のないようにね？」
「はい！……もちろんです！！」
「そうですか。いい返事です」
「では、失礼します」

拝啓～前世の家族へ～

祝!!軽音部設立!!

追伸

将棋で女神山先生に一向に勝てる気がしません…

七話！！！！！！！

「すいませんねぇ～、田井中君。重くないですか？？」
「いえ、大丈夫ですよ。女神山先生」
「やっぱり、男の子は力ありますねぇ～。……見た目女の子なのに……」
「……あはは」

放課後、今回は律と澪と3人で部室に行く途中、俺は担任の女神山先生に呼び止められた。
用はプリントを職員室に運ぶのを手伝ってほしいのこと。
『私たちも手伝います』と律たちが言ったが、俺は『一人大丈夫』っと言って2人を先に行かせた。
そして
……
……
……

「ありがとうございました、田井中君」
「いえいえ」
「本当に助かりました」

これまた優しそうな笑顔で言ってくれた。その笑顔を見ると、なんだが嬉しい、安心っと言った感じになり心が落ち着く。これは他の「三人天女」には感じられない。とくに最後の一人は。ていうか！！なんであの先生が「三人天女」に選ばれてんの？？選んだやつ絶対ドMだろ！！……まぁ～美人なんだけどさ。

「ほかに何か運ぶものとかありませんか？」

「いえ、とくには……あ、そういえば」
「何ですか？あるなら運びますよ？」
「いや…でも…さすがに…」
「任せてください！俺、すげ～力ありますよ！！どんなものでも運んでみましょう！！」
「……そうですかぁ～。わかりました。では……」
部活には遅れちまうが、女神山先生の笑顔が見れるのであれば、問題ないだろう。

「ではこれを外のゴミ捨て場の前において行ってくださいね？」
「……え？」
言葉を失うとはまさにこの状況！！俺が目にしたのはコンビニに置いてある大型のコピー機だった。それも3台。
「えっと……あの……」
「ではお願いしますね？私はこれから会議なので、もう行きますね」
「あ…えっと…」
「それじゃ、また明日」
ふッ……どうやら、俺はノーと言えない日本人らしい……
ぜッ！！

「……わり…遅れた」
「あ！兄貴」
「ケーくん、こんにちは」
「やっほぉ～ケーちゃん」
「遅かったなって……どうしてそんな疲れてるんだ？」
「実は……かくかくしかじか……」
「いや、それじゃわからないよ」

なんだ、澪。……ノリ悪いな

「コピー機3台！！」
「相変わらずのバカ力っぷりだなぁ～」
「たくましいって言え」
「ケーちゃんすごいね！！見た目ホント女の子なのに！！」
「……それ、褒めてる？」
「ふふ。……はい。ケーくんの分のケーキよ」
「待ってました！！」
「なんか、『ケーくん』って『ケーキ』に聞こえるな」
「ケーちゃん、ケーちゃん！！これもすごくおいしいよ！！」

あぁ～～！！俺って幸せ。

「ギターを見に？」

「そ。唯のギターを見に行こうって話になってさ」
「何だ、唯。まだギター買ってなかったのか？」
「えへへへ」
「兄貴も行くだろ？」
「もちろんだ」

てか、俺を仲間外れにしたら泣くぞ？……ガチで

「ちなみにケーちゃんのギターはいくらしたの？？」
「２０万」
「……私のお小遣い４０ヵ月分！！……部費落ちませんか？」
「落ちません」

……そんで日曜日
「おそいなぁ～唯のやつ」
「もしかして、まだ寝てるとか？」
「電話してみましょうか？」

俺……幸せだって改めて実感

「ん？ど……どうした、慶？ケーキ食べたような幸せそうな顔してるぞ？」
「ははぁ～ん……わかった。きっと澪の私服見て『かわいい、生きててよかったぁ～』とか思ってるんだよ」
「な！！そ…そうなのか／／／／」

「ぷっぷっぷ。そうだよ、そうだよ。な？兄貴？」
「その通りだ！」（グッb）
「はう～～／／／／」
「澪ちゃん顔まっかぁ～」
「ところで、律」
「ん？何？兄貴？」
「お前のおニューの服も可愛いぞ」（グッb）
「ふぇえ！！／／／／」
「りっちゃん顔まっかぁ～」
「は…早く唯に連絡いれよう！！」

まったく……律も澪もかわいいなぁ～もぉ～～！！

「もちろん、紬も可愛いぜ！！」（グッb）
「ふふ／／／／、ありがと。ケーくん」

あぁ～癒されるぅ～～

「……慶。はやく唯に電話して」
「え？澪？」
「そうそう。早くな、兄貴」
「えっと…律？」
「「は～や～く～！！」」
「わ…わかったよ」
「クスクスッ」

……なんか二人が怖い

「ん？ねぇ～あれ。唯ちゃんじゃない？」
「え？…あ、ほんとだ」

「お～い！！唯～～！」

俺が唯に連絡を入れる前に、唯が向かい側の信号に現れた。

……現れたのだが

「「「「……」」」」

（（（（（あと数mなのに辿り着かない））））

「お金、大丈夫だった？」

「お母さんに前借させてもらった。これからは計画的に使わなきゃ。

……いっけないんだけど……」

「「「「ん？」」」」

「今なら買える」

「コラコラ（汗）」

「ちょっと見るだけ……」

といって店の中に入ってしまった。

「ねぇ～ねぇ～、これ澪ちゃんに合うと思うんだぁ～」

「え！！こ……こんなの着れないよ／／／／」

「ぷぷぷぷ」

「えぇ～そうかなぁ～。……じゃ～ケーちゃんは？」

「いやいや、じゃぁ～って」
「そちらの商品はお客様にとてもお似合いですよ？」
「え？」

唯がさっきの服を俺にあててきたら、なんか店員がこっちに来た。

「お客様は身長がありますので、スラッとして綺麗に見えますよ？」
「いや、あの……」
「ご試着室はあちらになります」
「だ…だから…」
「来て見せてよぉ～、お姉ちゃぁ～ん」
「な！！」

律…貴様…何言ってやがる！！何が「お姉ちゃぁ～ん」だ！！

「そうだよ、着てみてよ！ケーちゃん！！」
「私も見てみたいわ～」

唯も紬も何言って……

「澪…こいつらに何とか言ってくれよ…」
「……私も見てみたい／／／」

まさかの裏切り！！！

……着てしまいました。

「ど……どう？」
「「「「わぁ～～！！」」」」
「大変お似合いですよ、お客様」
「すごくかわいいよ！！ケーちゃん！！」
「え……そう？」
「ドント来いです！！」
「良いよ！！慶！！すごく良い！！」
「もう完璧！いっそのことお姉ちゃんになっちゃえよ！！」
ちょ！バカ…そんな褒めんなって！！……照れるじゃねぇ～か
「次！次これ着てみてよ！！」
「その次これ！！」
「これなんてどうかしらぁ～？」
「私は…これがいいと思うなぁ～」
「お客様、これなんていかがでしょう？」
ちょ！お前ら調子に乗りすぎだって！！店員さんも！！ここは一度きつく言って……
「あたし……お姉ちゃんにもっと綺麗になってもらいたいなぁ～」
（キラキラキラッ）
「……もぉ～～しょうがないなぁ～！！」
……この後１０着、着ることになりました。
「お会計、６８，０００円になります」
……そのうちの５着、買ってしまいました。

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・

・・・・・

・・・

・

「へへ、買っちった」
「楽しかったですねぇ～」
「次、何処行こっか？……あれ、何か忘れてない？」
「楽器だ、楽器」
「あ！そうだった！」
「……」
「どうしたの？ケーくん？」
「お金……いっぱい使っちゃってなぁ～って……」
「計画的に使わなきゃダメだよ、ケーちゃん！」
「…………そだねぇ～」

「すご～い。ギターいっぱ～い」

俺がいまだに女物の服を購入の件を後悔している間、本来の目的である楽器屋に来ていた。

「ん～、選ぶ基準とかあるのかなぁ～？」

待ってました！！その質問！！！

「あ。兄貴復活」

「いいか、唯？ギターは音色はもちろん、重さやネックの形や太さがそれぞれ違う。だから、女の子はネックが細くて、軽いギターがおススメだ……」

「わぁ～このギターかわいい！」

（聞いちゃいねぇ～～）ｏｒｚ

「あ、また落ちた」

何だい！何だい！！

俺なんて……俺なんて……グスン……

「でもそのギター２５万もするぞ？」

「は！？ほんとだ！！」

２５万？？ってギブソン・レスポール・スタンダードじゃねぇ～か。へぇ～中々いいギター選ぶじゃん。けどそのギター、女の子が使うのはちょっと重くないか？？てか俺のギターより高いし…

「これはさすがに手が出ないやぁ～」

値段をみて傍から見て、悲しそうな顔をする唯。よほどこのギターが気に入ったのだろう。

「あっちに安いのあるぜ？」

「う～～ん……やっぱこれがいいなぁ」

「そういえば、私も今のベースが欲しくて……悩んで、悩んで……」

「私も中古のドラムセットが欲しくて……値切って、値切って……」

店員さん…泣いてたなぁ～

「あの、値切るって？」

「欲しい物を手に入れるために、努力と根性でまけさせることだよ」

「わぁ～、すごいですね！なんだか憧れます！！」

（（憧れる要素がどこに！！））

そんなことを話している最中、唯はギターから視線を外さなかった。

（なんか、悩んでベース選んでるあの時の澪みたいだな）

そんな唯を見ていた俺たちは……

「よし！バイトをしよう！！」

「え！？そんな悪いよぉ～！？」

「これも軽音部の活動の一環だよ」

「私！バイトやってみたいです！！」

ってなわけでバイトをすることになりました。

拝啓〜前世の家族へ〜

ところで買ってしまった服……どうすればいいでしょうか……？俺、男なんですが……あの後、聡に「兄ちゃん。姉ちゃんになるの？」って真顔で言われちゃったんですけど……

七話！！！！！！！（後書き）

外伝！！聡の日常！～その１～

オレには姉ちゃんと兄ちゃんがいる。姉ちゃんも兄ちゃんも優しくて両方とも好きだ。特に兄ちゃんはめっちゃ優しい。でも怒るとめっちゃ怖い…甘い物を勝手に食べると…

「なぁ～なぁ～！聡！今日、お前ん家行っていいか？」
「え、いいけど」
「あ！俺も行きたい！」
「僕も！」
「うん、いいよ」

最近、友達がよく家に遊びにくる。

「僕、聡君の家行ってみたかったんだぁ～」
「俺も！すっげ～綺麗なお姉さんがいるんだよなぁ～！」

え？姉ちゃんが？綺麗？

「うちの姉ちゃん、別に綺麗じゃないよ？」
「え？そうなの？」
「バカ、そんなわけないだろ！俺見たぞ！この間、聡ん家行ったとき、トイレに行く途中廊下ですれ違った！」
「おおぉ～！！」
「すっげ～綺麗で、オレに優しく『あ、いらっしゃい。聡の友達？』って声かけてくれたんだぁ～！！」
「おおおおぉ～～！！！」

「あんな綺麗な姉ちゃんもって、聡は幸せもんだなぁ～」
「なぁ～聡。俺たちをお前の姉ちゃんに紹介してくれよ！！」
「別にいいけど……」
「「「よっしゃ～～～！！！」」」

う～ん。どうしてそんなに盛り上がれるんだろ……そんな騒ぐほど綺麗かなぁ～。
あ！でも、兄ちゃんが言ってたな。他人と姉弟では印象が違うって。つまりこういう事か。

～田井中家～
「ただいまぁ～」
「「「お邪魔しま～す！！」」」
「ちょっと姉ちゃん呼んでくるから、オレの部屋で待ってて」
「おう！」
「ぼ…僕！緊張してきちゃった…」
「お…俺も…」

緊張するほどかなぁ～？？
確か姉ちゃんは今日は早く学校終わるって言ってたらから、家にいるハズ。

“こんこんッ”
「姉ちゃん、いる？」
『ん？いるよぉ～』

“ガチャ”

「どうした？聡？」

「実は……かくかくしかじか……」

「ふっふっふっふぅ～……そうか、そうか。そういう事なら仕方ない。よろしい」
「ありがとう、姉ちゃん。ところで兄ちゃんは？」
「マガ〇ン立ち読みしに行った」

「みんなぁ～、姉ちゃん連れてきたよぉ～」
「「「おおおぉ～～！！」」」
「どうも、初めまして聡の姉の律です」
「「「おおおぉ～～？？」」」

あれ？友達の反応がいまいち…

「なんか…違う…」“ヒソヒソ”
「うん、違うね」“ヒソヒソ”
「あれ～、おかっしなぁ～」“ヒソヒソ”

なんか友達がヒソヒソと話始めた。会話はよく聞こえないけど、どうやら思ってたほど姉ちゃんは綺麗じゃないらしい。
なんだ、やっぱ勘違いか……

『ただいまぁ～』

あ！兄ちゃんが帰ってきた。

「律～、聡～。ケーキ買ってきたら一緒に食べよう。……あれ？友達来てるの？」
「「「ん？」」」
「しまったなぁ～、もっと多く買ってくればよかった」
「「「おおおぉ～～～～！！！」」」
「な…何？」
「すっげぇ～美人！！」
「ホントにすごいや！！」
「な！！オレの言ったとおりだろ！！」

もしかして、友達が言ってた綺麗な姉ちゃんって……兄ちゃんのこと？

「なに？どんな状況？？」
「あ、あの！！オレ…いえ僕！聡くんの友達のA太郎です！！」
「B之助です！」
「C一郎です！」
「あ、はい。田井中慶です。えっと…ゆっくりしていってね」
「「「はい！！」」」

ちょっと引きつった顔して部屋から出ていく兄ちゃん。

「噂通りの姉ちゃんだったな……」
「へへぇ～、最後俺に微笑みかけてくれた」
「バカ！俺にだよ！！」

いやいや、あれは苦笑いだよ。
そのあと、本当のこと教えたら…

「「「それでもいい！！」」」

っと、評価は変わらなかった。
兄ちゃんも姉ちゃんもほとんど同じ顔なのに変なの……って姉ちゃんは？

一方律は……

「どうせあたしは…女っぽくないよ…」

部屋でいじけていた。

八話！！！！！！！！

「……たいくつ（カチャッ）……暇だ（カチャッ）……飽きる（カチャッ）」

現在、俺たち軽音部は交通量調査のバイトに勤しんでいた。
正直に言って、俺はこんなバイトしたくなかった。地味だし、ただ座ってるだけだし、時間経つの遅く感じるし、天気いいし、眠くなるし、甘い物食べたくなるし、ケーキ食べたいし…もう不満しか出てこない。
大体、俺は男だからもっと高収入なバイトとか選ぶはずだったが……引っ越しのバイトとか、電化製品の倉庫整理のバイトとかの力仕事だ。俺のギターもそのバイト代で買ったんだし。（当時中学生。年齢偽って働いてました）

「……（カチャッ）……（カチャッ）てか一人って……」

じゃぁ～なんでこのバイトになったかというと、我が幼馴染の秋山澪が原因だ。澪はご存知の通り、かなりの恥ずかしがり屋。
ティッシュ配りはダメ。コンビニはダメ。宅急便はダメ。ウェイトレスもダメ。
どれもこれもダメダメな澪ちゃん。まぁ～途中で『私…なんでもやるよ！！』っと宣言してたけど……うん、泣いて俺に抱き着いてくる澪を安易に想像できてしまう。

「泣いて抱き着いてくる澪は格別に可愛いんだけどねぇ～」（カチャッカチャッ）

昔から澪は泣き出すと俺に抱き着いて助けを求める。初めて抱き着

かれたときは幸せすぎてヤバかった。
……待て、よくよく考えると俺は澪に異性として見られてないんじゃね？？一緒に行動しすぎて友達以上恋人未満が確定？？初恋は実らない？？ただの幼馴染止まり？
……
「はは……（カチャッ）まさか……はは……そんなわけ（カチャ…カチャカチャッ…）……ぐおおおおおおお！！（カチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャ×１０）イテッ！！」
手が攣りました。

「ああ～しんどい…」
「あ、お疲れ。慶」
午前の部が終わり、みんなのところに戻るとすでにシートを広げ、お昼の準備ができていた。そこで俺に一早く気づいたのが澪だ。
アレ？どうしてだろ？澪の顔みるとなんか目から汗が…
「……グスンッ」
「ど…どうしたんだよ！？慶」
「あぁ～あ、澪、兄貴に何したんだ？」
「わ、私は何も！？」
「大丈夫…澪はなんにもしてない……」

「じゃどうしたんだよ？」
「……昔の俺に別れを惜しんでたんだよ」
「「？？？」」
2人は意味がわからないって顔をしていた。
安心しろ、二人とも。俺も意味わからないから。

「天国じゃぁ～」
「ケーちゃんってホントにケーキ好きだね！」
「むふふふ、ケーキ＝命みたいなもんじゃからなぁ～」
「それにしてもムギちゃん。こんなに高そうなケーキ毎回食べても大丈夫？？」
「もらい物だし、家においても余らせてしまうから」
「へぇ～（いつもこんな高そうなケーキを毎日…お嬢様！！）」
「（パクッ）……むへぇ～／／／」
「「……（かわいい）」」
ああぁ～平和だ…
……
……
……
……
そして一日目終了！！！
「じゃ～私は駅に行くから」

「あたしと兄貴と澪はバスだから」
「唯は歩いてか」
「うん」
「気を付けてな？」
「ありがと！ケーちゃん！」
「じゃ、明日も……」
「ケー…」
「うん！お菓子よろしく！！」

……キ。

「……頑張りましょうって言おうとしたんだけど…」
「えへへへ」
「おいおい」
「まったく」
「……」
「ん？どうした？慶？」
「え！？いや……そうだぞ！唯！しっかりしなさい！」
「えへへぇ～、つい」

バイバイッと言って唯は背を向け歩き始めた。
危なかったぁ～！！「ケーキよろしく」って言いそうになったぁ～！！唯のこと言えねえ～！！

「兄貴、さっき『ケーキよろしく』って言いそうになっただろ？」
「ちょ！？バカ！俺がそこまで一日中ケーキのことばかり考えてるとでも言うのか！！」
「そうだぞ、律。いくら慶がケーキが死ぬほど好きだからって、さすがにそれはないよ」
「冗談だって。あたしもそんなことは思ってないよ」

すいません…ケーキのことしか頭にありませんでした。
そんなことを思っていると…

「みんなぁ～！今日はホントにありがとう！！私！ギター買ったら毎日練習するね！！」

手を振りながら満面な笑顔の唯。それを見て俺たち４人は頬を浮かべる。
そんな笑顔を見ていると、さっきまで考えていたケーキのことなんて忘れてしまう。
俺はしばらく唯を見ていた。（と言っても３０秒くらい）

「いつまで見てるん…っだ」“ムギュ～”
「バス来たから帰ろう…ッね」“ムギュ～”
「ふぁれ？ふぁんでふへはれへんほ？（あれ？なんでつねられてんの？）」

あれか？反抗期か？

二日目！！

とくに一日目と変わらんので

……省略！！！

「二日間お疲れさま」
「「「「「「ありがとうございました」」」」」
二日間にわたる交通量調査のバイトが終了した。
そして昨日と同じバス停で。
「はい」
唯にそれぞれ貰ったバイト代を渡した。
「しっかし、一日一人八千円かぁ～」
「五万合わせても全然足らんな…」
やっぱり俺は別行動をしてほかのバイトをするべきだった。今さら後悔しても遅いが…
「もう2～3回バイトするか」
「そうだですねぇ」
「あの…」
「ん？どしたぁ～唯？」
「やっぱり、これいいよ…」
「「「「え？」」」」
「バイト代はみんな、自分のために使って」
「唯ちゃん…」
「私、五万円で買えるギター買うよ！」
「「唯」」
「あ、その時ケーちゃんギター選んでくれないかな？みんなもつい

てきてほしいんだけど……いいかな？」
「唯…いいのか？」
「うん！！一日でも早く練習して、みんなと一緒に演奏したいもん」
『一緒に演奏したい』そういった唯の笑顔は本物であった。本物、別に今までの笑顔が偽物という意味ではないけど。しかし、明らかに今までの笑顔とは違っていた。チラ見でみんなを見ると、そう感じたのは俺だけではなかったようだ。律も、澪も、紬も。みんな唯の笑顔の中にある思いが伝わった。
そして、気が付くとみんなその笑顔につられて笑顔だった。
（ああ、そうか…俺も…俺たちも唯と同じだ…）
俺たちも唯と『一緒に演奏したい』んだ。

そんなわけでやってきました！！！音楽ショップ『１０ＧＩＡ』！！
さてさて、俺はさっそくギター選びに取り掛かりますかねぇ～
「あッ」
っと唯が声を漏らす。その視線のさきにはギブソン・レスポール・スタンダード。
「よほど欲しいんだな…」

そんなにこいつに惚れ込んでんのか…だったら…

「唯、それにしな」
「え…え！？」
「そいつも望んでるよ。お前に弾かれたいって。相思相愛だ」
「で…でも…お金が…」
「またバイトして貯めればいい。みんなでやればすぐに貯まる」
「うぅ～けど…」
「俺もお前がこのギターで演奏してほしいと思ってる。気持ちいぜ
え～、好きなギターで演奏したら！！俺が言うんだ！！間違いない」
「ケーちゃん……」
「みんなも同じ意見らしいぞ」
「え？」

唯が3人を見る。

「唯、慶の言うとおりだ」
「それじゃまたバイトするか！
「あ！！ちょっと待って！！」

と急に何か思い出したように紬が声を上げた。

「どした？紬？」
「うん、ケーくん。私にいい考えがあるの」

といって店員のほうへ向かっていった。

「どうしたんだろ？ムギのやつ」
「さぁ～？」

「……値切ってたりして…」
「まさかぁ～」
「さすがにそれは…」

だよなぁ～。一体いくらまで値切るつもりだって話だよ……律じゃあるまいし。
値切れて２０万までだな……。
あ、戻ってきた。

「このギター、５万で売ってくれるって」
「はぁ～～～！！」
「え！？マジで！！」
「何！何したの！？ムギちゃん！！」
「…慶、声大きい…」

え…いやだって…

「実はこの店、うちの系列のお店なの」
「マジかよ…」
「うう～～！！ありがとう！！ムギちゃん！！残りはちゃんと返すから！！」

５万だよ？２５万のギターが５万だよ？？２５万÷５＝５万だよ？

「よかったなぁ～唯！！」
「うん！！」
「これで楽器が揃ったな」
「ふふ、よかったですね」

５万…五万…ゴマン…ごまん…

「よ～し！唯！さっそく家に帰って練習するようにって…兄貴、何財布の確認してんの？？」
「え！？いや！！今日はいくら入れたっけなぁ～って思ってさ…アハハハハハ…」
「まさか…慶…そのギターを唯より高く買って自分のものにしようなんて考えてたんじゃ…」
「ええ！！そ…そうなの！！ケーちゃん！！」
「ま…まさか！！俺がそんなことするわけないだろ！！変な勘繰りはやめろよな…」
「ふふ、冗談だよ。慶」
「兄貴がそんなことするなんて思ってないよ」

ごめん…ちょっと考えちゃった…
でも言い訳させて！！だって5万だよ！！そりゃぁ～考えちゃうって…

「では、気を取り直して…唯！さっそく練習するように！！」
「はい！りっちゃん隊長！！」
「わからないところは兄貴に聞くように！！」
「はい！りっちゃん隊長！！」

あぁ～なんて羨ましい。羨ましいけど…まぁ～いいか。唯、嬉しそうだし。それに…

「これで、いよいよ軽音部本格スタートだ」
「そうだな」
「そうですね」

拝啓～前世の家族へ～

お嬢様ってホントにいるんですね。

九話！！！！！！！！！

平凡で、平和な日常。とくに変化など起きず、日々を過ごしている。俺の前世はそんな変化のない日常が嫌いではなかったが、何か物足りない気がした……と思う。というのは、自分が本当に転生者なのかと思うくらい、最近は前世のことはあまり覚えていない。思い出そうとしても、濃い霧が頭の中を覆ってよく見えない。最初はそんな現象に恐怖心を抱いていた。大好きだった家族、友達、恋人。その人たちと過ごした時間が、実は夢だったのでは？…そう思うと怖くて堪らなかった。

怖くて堪らなかったが、慣れとは恐ろしい。今ではそんなことはない。むしろもう夢でいいんじゃないかとさえ思っている。そう思えるのは…それほどまでに、今を生きている時間がこの上なく素晴らしく、そして大好きだからだ。

……ある日を除けば……ね。

とかまぁ～そんなシリアスな話はどうでもよくって……

そんなことより紬のケーキを食べましょう！！！

「（パクッ）……むへぇ～／／／／」

拝啓～前世の家族へ～
今日も平和ですｗｗｗ
てかこのケーキ上手すぎ！！

「じゃ～ん！！」
「似合う、似合う！」
「様になってるなぁ～」
「唯ちゃん、かっこいいぃ～！」
「えへへへ」

お気に入りのギターを購入した唯はご機嫌であった。ギターを肩に掛け、嬉しそうにギターを弾く……ふりをしている。
それしても…５万かぁ～
紬があそこまで値切ってくるとは、想像してなかったからな。驚いたもんだよ。
俺が今狙ってるアコギも紬に頼んで値切って貰おうか……

“チャリ～ララ♪　（以下略）”

『チャルメラかよ』
『まだこれしか弾けないんだよねぇ～』

いや、さすがにお店の人に悪い。紬は十中八九値切ってくれそうだが……（しかも嬉しそうに）お金は交通量調査のバイト代と貯金を合わせれば……ギリギリ足らないが、そこは俺の値切り術でカバーしよう。俺が値切る分は大丈夫だろう…

『唯って携帯のフィルム外してないだろ？』
『え！？どうしてわかったの！！』

今度「１０ＧＩＡ」行くか。

『え～い！』
『ああぁ～～！！』
『……なんちゃってぇ～』
『律…謝りなさい』

それしてもこのケーキ上手いなぁ～。絶対高いよなぁ～。

『ほら、唯ちゃん。お菓子だよ～♪』
『いや、ムギ…さすがにそれで機嫌が…』
『（モグモグ）……おいしい～♪』
『なおったぁ～～～～！！』

自分で作ってもこんな味にはならないよなぁ～。これがプロの技というわけか…
つうか…さっきからアイツら何してんだ？

“じゃら～ん”
『おお！！かっこいい！！』
“チャラリ～ララ（以下略）”
『まだこれしか弾けないけど…』

『アンプでは練習してからだな』
『そうだねぇ～』
『あ！！唯、危ない！！』
“ボンッ！”
「ふぎゃ！！」
「ぐほッ！！」
ぐおぉ～～～！！耳が…
「アンプのボリューム下げてから抜かないとそうなるよ…」
「早くいってぇ～…」
「耳が…耳が…うお～～～……」
「ケーくん、大丈夫??」
「兄貴はこの音が超が付くほど嫌いだからなぁ～」

「よし、じゃ～さっそく練習しようか。唯はまずギター弾けるようにならないといけないから……慶に指導してほしいんだけど、慶…耳大丈夫??」

「あぁ～…大丈夫だ」
「じゃ～お願いしていいかな??」
「任せろ」
「お願いします、ケーちゃん先生」

唯が頭を下げてきた。
『先生』。そう言われた瞬間、俺の心の奥底にある熱い物が吹き上げてきた。

「……ケーちゃん?」
「慶?」

俺は椅子から立ち上がり、窓の傍で外を見て言った。

「唯……」
「は…はい!」

いつもと違う雰囲気の俺に少し戸惑う、唯。

「ギターの道は果てしなく遠い……幾度なく挑戦者が現れたが……ほとんどの者が挫折し、去っていった……」
「……“ゴクリ”」
「つらい修行になるぞ……ついてこれるか??」

『え?何この空気?』って顔してる奴が2名ほどいるけど、無視。

「……私……私……みんなと一緒に演奏したい!!ケーちゃんみたいにかっこよくギター弾きたい!!」
「よくぞ言ったぁぁぁ!!俺が必ず弾けるようにしてやる!!!俺についてこい!!」

「はい！！」
「そして、今後は俺ことは『師匠』と書いて『マスター』と呼びなさい！！」
「はい！！師匠（マスター）！！」

俺と唯は手を取り合って意気込んでいた。

「……慶のバカ」
「兄貴……はぁ～」
「……“ポ～”／／／／」

「それでどうするんですか？師匠（マスター）」
「まずはコードを覚えなきゃならん。へい！澪！カモン！例のもの…」
「え！？えっと…これのこと？？」
「イエス！！」

澪が持ってきたのは『サルでもわかるコード集』税込１２００円。
さすが澪だぜ。俺たちはもう心が繋がってるな！！

「こいつは俺が使ってたコード集だ」
「へぇ～……師匠（マスター）ってサルだったの？？」

なんかこの子めっちゃ失礼極まりないこと言ったんですけどぉ～～！！

「ちょッ…兄貴固まっちゃったじゃん！」“ヒソヒソ”

「唯！そうじゃないよ…サルでもわかるくらい解りやすいってことだよ」“ヒソヒソ”
「そうなんだぁ～。へぇ～」
“オホンッ”
「決して俺はサルではありません。……そのコード集はものすごく解りやすく書かれてあるから、始めた当時に俺が愛用してたのだよ。決して俺はサルではありません」
「そっかぁ～、師匠（マスター）の原点なんだね！！」
「（二回言った…）」
「（二回言ったな…）」
「（二回言いましたね…）」
唯は『ふ～ん』『なるほど～』っと言いながらパラパラと捲っている。
「何かわからない箇所があったら言ってくれ」
「はい！！師匠（マスター）！！」
「お、さっそくか」
「楽譜の読み方をおしえてください！！」
「そこからかッよ！！」
「じゃねぇ～」
「それじゃぁ～また明日ぁ～」
あの後、楽譜の読み方を教えて簡単なコードを教えた。

CとかDとかEとか……
んで今はいつもの3人で下校中

「あぁ～甘い物たべてぇ～」
「部室で食べてじゃん」
「いやぁ～ほら、夕方のおやつってよくいうじゃん？」
「それ、兄貴だけだろ？？」
「そんなわけで…ミ〇ド行きましょう！！」
「兄貴の奢りねぇ～」
「ちッ……しょうがねぇ～」
「やり～！澪、兄貴が奢ってくれるって！」
「あ、ごめん。今日はまっすぐ帰るよ」
「え？どして？」
「中間テストが近いからさ。そろそろ復習とかしとかないと。赤点なんてとる訳に行かないからさ」
「そうか…中間のこと忘れてたぜ」
「でも、まだ2週間近くあるよ？」
「中学と違うんだから、今のうちにやっとかないと…」

ふぬ…確かに…

「それもそうだな。今日はまっすぐ帰るか」
「えぇ～～～！！」
「うっせなぁ～…そんな大声あげるなよ」
「兄貴奢ってくれるっていったじゃん！！」

いや言ったけどよ…

「さすがに俺も何も勉強とかしてないし……軽くやっとかないと」
「兄貴は勉強できるから問題ないって！！ねぇ～行こうよぉ～」

「お…おい、律。慶をあまり困らすなって…」

ん〜〜。ミ〇ド行く時間ぐらいはあるか??

「わ、わかった。んじゃドーナツは持ち帰りにしよう。それなら澪もいいだろ??」

「え?あ…うん。それなら私は別に…慶が奢ってくれるし」

あ、やっぱ奢んのね…

「よ〜し!!んじゃさっそくミ〇ドへレッツゴー!!」

拝啓〜前世の家族へ〜

俺の中でストロベリーリングとオールドファッションは鉄板です!!

九話！！！！！！！！！（後書き）

もっといいことミ〇タードーナツ♪

ミ〇ドに入ると必ずストロベリーリングとオールドファッションにさらにアイスティーを頼む、あなか１５号です。

最近なかなか執筆が進みません。ちょっと苦労気味です…
３年の文化祭の劇とかラストライブとか最終回とか脳内で完成してるのですが……
そこまで到達できるのがかなり先の話だなァ～っと……何とか完結させたいです。

遅い更新ですが、必ず完結させます！！
次回もよろしくお願いします。

十話！×１０

試験（しけん）とは、被験者または試料の能力や性質を測定するために行う行為のこと。検査（けんさ）、テストとも呼ばれる。
試験の成績は、普通、採点をして得た得点で表される。合格／不合格の判定も、いったん得点を出して、それにより判定することが多い。
学校でいわれる試験については、幼児、児童、生徒、学生などの学習活動、学業の成果を検査するための手段を指すことが多い。
ｂｙ　Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ

「ふぅ～、こんなもんだろ。あとは当日に軽く復習すれば……ってもう２１時か」

中間テスト１週間前となり、すべての部活が活動休止となり、全校生徒が勉学に励んでいた。それは、軽音部も例外ではなく、その一員である俺もテスト勉強をしていた。今日はテスト二日前の土曜日だ。

「う～～～～んッッッッぷはぁ～…あぁ～糖分たりねぇ～…」

俺はテスト勉強に区切りをつけ、大きく伸びをする。休みの土曜日をテスト勉強に消費したから、体の所々錆びついたように固い。主に首や肩など……

「……今日一日は高校受験並みに勉強したな…」

はっきり言おう。俺は勉強ができる。かなりできる。得意科目は国語・数学。超得意科目は英語だ。国・数は９０点以下はとったことないし、英語は常に９８点以上。ＴＯＩＥＣも８割以上とれる自信ある。先の三教科ほどではないが、社会も理科も問題ない。俺に不得意科目はない。

…が俺は天才ではない。俺はただ勉強ができるだけ。てか、勉強しないと悲惨な目に合うのは間違いない。それに俺が勉強できるのは…おそらく俺が転生者であることが関係してると俺は考えている。天才はホントに天才なのだ。……上手く説明できないが。まぁ～、そんなことどうでもいいか……

「さて、明日はどうするか…みんな勉強してるだろうし……一人でぶらりと出かけるか、ギターを弾くか、絵を描くか、将棋の棋譜を並べるか、小説書くか、本読むか…」

俺って結構多趣味だな。

“コンコンッ”

『兄ちゃん、入っていい？』

明日のことを考えていたらノックする音が聞こえた。

「ああ～いいぞ」

“ガチャッ”

「失礼しま～す」

入ってきたのは弟の聡だ。手には何やら参考書、または教科書らしき本を持っていた。

「兄ちゃん、今大丈夫？」

「あぁ～、大丈夫だよ。ちょうどテスト勉強に区切りをつけたところだ」
「ホント？それじゃ～勉強見てほしんだけど…いい？？俺、月曜日テストあるんだ」
「へぇ～、中学も月曜日に中間か」
「うん。ホントはもっと早く兄ちゃんに見てほしかったんだけど…兄ちゃんの学校も同じ時期にテストあるって姉ちゃんから聞いてて」
「邪魔しちゃ悪いと思ったのか？」
「うん」

かぁ～わ～い～い～！！ウチの弟めっちゃ可愛いですけど！！こんな可愛い弟もってお兄ちゃん幸せもんだぁ～！！！！！生意気なこと言わないし、素直だし、兄思いだし……ホントすばらしいな！！

「一人でやってたんだけど、どうしてもわからないところがあって……」
「兄ちゃんに任せな。んで、どんな教科なんだ？」
「英語と数学」
「すげ～任せろ。すべて兄ちゃんに任せろ……余裕で８５点以上とれるようにしてやる」
「おお～～！」
「ちなみに担当の先生は誰だ？」
「英語は玉葉（ぎょくよう）先生で数学は空言（くうげん）先生」

たま先とそら先か……よし…

「だったら、９０点はとれるな。アイツらのテストの傾向パターンはすでに読み切っている」
「きゅ…９０点！！」
「ふっふっふっふ…３時間…いや、２時間でマスターさせるぞ！！」

「お願いします！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・
・・・・

「ありがとう！兄ちゃん！」
「あとは俺が作った出題予想問題をちゃんと解いていけば、当日は余裕だろう」
「うん！！それじゃ～お休み、兄ちゃん」
「ああ、お休み」

聡はテスト勉強を終え、自分の部屋に戻って行った。聡は中々優秀な部類に入るため、予定していた時間より早く切り上げることができた。

「さて、俺も寝ますかな…」

“プルプルプルプルプルッ”

っとケータイから着信音が…
画面を見ると秋山澪の名前があった。

「もしもし？」
『あ、慶？こんばんば。夜遅くにごめんね』

「別に大丈夫だよ。どした??もしかして寂しくて電話しちゃったとか??」
『ひぇ!?…な、何言ってるんだよ!?』
「はっはっはぁ〜、すまん、すまん」
『もぉ〜…バカ慶…///』

俺の本気度7割の冗談に、澪はちょっと慌てた感じであった。まったく可愛い反応しやがる。
それにしても、この反応…もしかしてちょっとは俺も意識されてるってことか??いっそのこと明日デートに誘っちまうか??
……いやまて!!あまり期待を持ち過ぎはダメだ……前世でそれでかなり痛い目みた気がするからな…それに、2人でよく出かけることもあるから、今更デートと認識されない確率の方が高い。……ちきしょう、道は遠いぜ

『慶?どうしたの??』
「あ、いや…なんでもない。で?どうしたんだ?」
『あのさ…えっと……明日、一緒に勉強しない??』
「テスト勉強??」
『うん。慶って教えるの上手だから、私の勉強見てくれるといいなぁ〜って思って……ダメっ…かな??』

ダメなわけがなかろうに!!

「ああ、いいよ。俺に任されよう!!」
『ホントに!!ありがとう!慶!!』

電話越しから嬉しそうな声が聞こえる。
まぁ〜ぶっちゃけ、澪は勉強できるから俺が教えることって、たぶんあまりないだろうけどね。

「じゃ～明日、俺ん家に来いよ。俺の部屋でやろうぜ」
『うん！！』
「じゃ～１０時くらいでいいか？？」
『大丈夫だよ！』
「ＯＫ。んじゃ明日、待ってるぜ」
『うん、ありがとう！それじゃ、明日ね。お休み、慶』
「ああ、お休み、澪」

俺はケータイを切る。

「さて、俺も寝ますかな」

「さて、はじめますか」
「うん」

翌日、俺と澪はさっそく勉強を始めた。澪は俺の向かいに座った。

「昨日一人でやっててわからない所があったんだけ…」
「ん？どこ、どこ？？」
「ここなんだけど…」

澪がノートを広げ俺に見せてきた。
なんともまぁ～綺麗で見やすいノートなんでしょ。

「ああ、ここは…」
「うん…」

「つまり……ッ！！」
「うんうん」

なッ！！さっきまで向かい側に座ってたのに、俺の横に移動している！！寄り添うように！！
しかも、今日の澪の服装は、結構胸元が開いてるから谷間らしきものが見えるんですけど！！！！

「ん？慶？」
「はッ！！」
「どうしたの？？」
「いやなんでもない！！！全然なんでもないですよ〜〜〜♪！！」
「クス、変な慶」

集中、集中、集中、集中、集中、集中、集中、集中、集中、集中……………集中！！！

俺！！すっげ〜〜集中！！！！

「そうか！なるほど…」
「わかった？？」
「うん。よくわかったよ！！」

ふっふっふっふ……………俺の集中力すげ〜ぜ………鼻血出たらどうしようかと思ったけど…何とかセーフだ…もう、密着されても大丈夫だろう。

「慶ってやっぱ教えるの上手いな！」

ドッッッキュン♪

…澪よ……そんな可愛い笑顔で俺を見てはいけません……俺をキュン死させたいのですか！！

「ほ……他に、分からないとこある？」

「えっと、ここがちょっと…解けるんだけど、どうしてこうなるか解らなくて…」

ふむふむ…ここは、

“バタンッ”

「うおッ！」

「ひゃッ！」

いきなり部屋の扉が開かれて、俺と澪は驚いた。扉の方を見ると、律がいた。

てか、澪はビビッて俺に抱き着いてます！！！相変わらずいろいろやわらかいです！！！

「り…律？」

「ど…どした？律？？」

「……兄ちゃん、澪」

俺は即座に嫌な予感がした。律は普段、俺のことは『兄貴』と呼んでいる。しかし、これは意識して呼んでいるらしい。本気で嬉しいとき、楽しいとき、困ったとき、苦しいとき、悲しいとき、怒った

ときなどには『兄ちゃん』と無意識に呼んでしまう。
ほら、アレだ……家では『パパ、ママ』って呼んでるけど、外では意識して『お父さん、お母さん』と呼んでいる。けど、焦ったときなんかでつい『パパ、ママ』って呼んでしまった、アレだ。
そして今回、どんなときかというと…表情は俯いててわからんが、雰囲気から察するに…

「勉強教えてぇ～～～～！！！！！」

本気で困ったときのようです。

拝啓～前世の家族へ～
……女の子って……柔らかい。

十一話（！×１０）＋！

結局、澪とのラブラブイチャイチャ勉強会（仮）はすることはできず、律のテスト前日一夜漬け勉強会となった。
腹いせに適当に教えようと思ったが、妹が赤点なんて俺自身気分悪いからちゃんと教えることにした。
まぁ～こいつは勉強の仕方がわからないだけだから、ちゃんと教えればできるようになる。……たぶん。
しかし、今回は澪も先生役になったから効率よく教えることができた。
そして翌日からの中間テストは無事に終わった。

「終わったぁ～！！」
「慶の予想問題はバッチリだったな！」
「俺の予想問題はただの確認だ。澪の実力だよ」
「そ…そうかな／／／」
「私は難しくて大変だったわぁ～。ケーくん、私にも今度勉強教えてくださいね」
「ああ、構わないよ」

けど、紬も澪と同じで自分で勉強できる人間だから俺の助けはおそらくいらないだろう。
助けが必要なのは……

「クラスで一人、追試だそうです…」

ここに一人……
……そして１２点の答案を見せんでいい。こっちも悲しくなる。

「（うわぁ…）」
「大丈夫よ！今回は勉強の方法が悪かっただけじゃない？」
「そうそう！ちょっと頑張れば追試なんて余裕余裕！」
紬と律が赤点の唯に励ましの言葉を贈る。けど、ちょっと苦しい励ましだと思うぜ？１２点って…ねぇ～…
「え？全然勉強しなかったけど？」
「励ましの言葉返せコノヤロウ」
ごもっとも…

「なんで勉強しなかったのさぁ～？」
「いやぁ～、しようと思ったんだけど…。なんか試験勉強中ってさ勉強以外のことに集中できたりしない？」
「あぁ～それあるなぁ～…部屋の掃除片付いたり…」
「それで、勉強の息抜きにギターの練習したら抜け出せなくなっちゃって…全然勉強できなかったんだよね…」
「はは、なんか唯らしいな」
「え？そうかなぁ～／／／」
あぁ～ごめん。別に褒めてないや。
「でもね！！おかげでコードほとんど弾けるようになったよ！！」
なんて清々しい笑顔とピースなんでしょ。１００点あげたいね。

「その集中力を少しでも勉強にまわせば…」
「むぅ～…そういうりッちゃんはどうだったのさ！！」
「ん？あたし？……余裕ですよ！この通り！！」

ジャジャーン！！という効果音が流れてきそうな見せ方で唯に自分の答案を突きつけた。

「こんなの……りっちゃんのキャラじゃない…よ」
「オーホホホホ！！あたしのような人間になると、なんでもそつなくこなしちゃうのよ！」
「りっちゃんは私の仲間だって信じてたのに…」

まるで捨てられた子犬のような目で律をみる唯。
しかし、律よ……

「「テストの前日に勉強わからないって泣きついてきたのはどこの誰だっけ？」」
“ギクッ”
「あ！！バラすなよ！！二人とも！！」
「それでこそりっちゃんだよ！！！」
「赤点取った奴にいわれたくねぇ～！！」

お？今度はいい顔になったな。

「しかし律よ。お前、俺と澪に勉強見てもらっておいてその点はなんだ？」
「え…兄貴？？……えっとでも！悪くない点数だよ！むしろいい点！！」
「どうなんだ？」

「えっと…その……」
「お前…まさか俺が作った予想問題をやらなかったのか？」
「……」
「やらなかったのか？」
「……はい」

まったくこの子は……今回のテストは俺の予想問題が約７割から８割程度、同じ様な問題だったからな。最低でも８０点の点数。さらに俺と澪が教えたから９５点以上は確実に取れるはずなのである。

「澪ちゃんとムギちゃんとケーちゃんは何点だったの？」

俺か？俺はだな…

「はい」
「ほれ」
「ん」

唯が俺たち三人から答案を受け取る。律も見ようと、横から覗き込むように見てる。

「おぉ～」
「うぇ…」

答案を見た途端に唯と律は驚きの表情となる。だが、同じ驚きでも意味は異なっていた。

「うッ……うぅ～」
「へぇ～…」
「ほ…ほら！あたしはポカミスしちゃったし…」

「うんうん」
「ミスがなければこれくらい…」
「……」
「お願いだからなんか言ってぇ～…」

ちなみに俺は満点です。

……べつの日！！

「あ！　今日は羊羹～♪」

唯は遅れて部室にやってきて、羊羹を見るなり嬉しそうに自分の席に着く。
和菓子はやっぱお茶だよねぇ～♪ん～～、お・ち・つ・く……
いつもうるさい律も静かだし、お茶はすごいねぇ～。
……ズズズズズズゥ～～～……ップハぁ～…ホッ

「……モグモグ……追試の人は合格点とるまで部活動禁止だって…
ハグハグ……」

そう、例え今唯が爆弾発言しても今の俺たちは全然動じない。羊羹うまうま…
……は？

「「「えぇ～！！」」」
「ムグッ！！！」

よ…羊羹が…喉に……！！

「結構厳しいなぁ」

「そしたらここにいるのも不味いんじゃ…」

お…お茶……なッ！！空っぽ！！

「大丈夫だよぉ～。お菓子食べに来てるだけだし」

だ…誰か…お茶…を…！

「あ！そっか！！それなら安心だぁ～」

ちょ…マジで…息が……

「ってなんでやねん！！」

「ぐぇ～」

“パンパンパンパン…”

「もしも唯が部活できなくなったら…私たち４人だけになっちゃうんだよ？」

「はッ！！ひょっとして……」

……も…だめ……

「……部員数が足りなくなる」

「それで……廃部…」

バタリ……。

「追試はいつあるの？」

「1週間後」
「1週間後かぁ～」
「そんだけあれば、毎日ここに来ても大丈夫だよねぇ～」

……。

「そんだけしかないの！！」
「追試に受からないと、このクラブ自体なくなるかもしれないんだよ？」
「そうだよね！！みんなと部活続けたいから、私頑張る！！」
「ん～」
「どうしよう、慶…って慶？」
「ケーくん？」
「兄貴？」
「ふぇ？ケーちゃん？」

返事がない…ただの屍のようだ…

「に…兄ちゃん！！」
「慶！！しっかりしろ！！」
「待って！！ケーくんが何か言ってる！！！」
「「ん？」」
「お……お茶…を……」“ピクピク…ピクピク…”
「お茶ぁ～～～～！！！」
「慶ぃ～～～！！！お茶だぁ～～！！」
「澪ちゃん！りっちゃん！！落ち着いて！！そのお茶まだ……」

2人は紬の静止も聞かず、俺の口にお茶を入れ…もちろん激アツ

「＄％＆、（）（，＆％＄＃“＃＄％＆、（）＝）」

あまりの熱さで声が出ません。
そして……
チ～ン……
俺の意識は完全にブラックアウト…

「兄ちゃぁ～～～ん！！」
「慶いいいいいいい！！」

拝啓～前世の家族へ～
％＆‘（）（，＆％＄＃＄％＆‘（）（，＆‘＆％＄＃“！＃
＄％＆，（）

十二話（！×１０）＋！！（前書き）

書き続けるって難しいと改めて実感……

十二話（！×１０）＋！！

唯の追試まで…あと６日……

今日のお菓子はフルーツたっぷりプリンです。

「……なんか唯がいないと張り合いないな…」
「その割にはよく食ってるな」
「へへぇ…それとこれとは話が違いますワン」
「唯…ちゃんと勉強してるかな…どうかな？慶？」
「ふぁいじょうぶふぁろ…ふいをふぃんひろ…」
「慶……口の火傷は私と律のせいだから本当に申し訳ないと思うんだけど……何言ってるかわからない…」

が～ん！！

唯の追試まであと……３日！！

今日のお菓子はカステラ！！３時のおやつは文○堂！！

「唯…勉強進んでるはずだよね…」
「……ん～…進んでるかな…」
「……どう思う？慶？」
「……カステラ美味いな……」
「ちょっと慶！」
「すまん」

ん〜〜唯の勉強ねぇ〜…
俺は唯の勉強している姿を想像してみた……すると不思議なことにベッドの上でコロコロ転がりながら漫画読んで、お菓子食べてる姿しか思い浮かばなかった……
……なんでだろ

「やっぱ…心配になってきた…」
「お…同じく……」

どうやら律も同じ想像をしたらしい…さすが双子！！

「今晩、励ましのメールを送るのはどう？」
「お！名案だな！！」
「うん！私もやってみるよ！！」
「さすが紬！！」

だてに美味いお菓子持ってきてないぜ！！

帰宅後…

「さて…なんて送ろう…」

ここは無難に『頑張れよ』かな？

「いや、俺たちは仲間なんだ！！そんな頑張れの一言で済ましていいはずがない！！」

そういえば…律が『唯がいないと張り合いがない』って言ってたな…うん。確かにその通りだ！よし…なら…

『平沢　唯様
あなたがいなくなって、軽音部がとても寂しい感じがします。そんな風に感じるのは…あなたの元気で明るい声に僕は、とても惹かれていたんだと思います。だから…だから絶対帰ってきてください。ずっと待ってます。

田井中　慶』

「……うん…なんか違うよね…」

『お前…ちゃんと勉強してんのか??ちゃんと勉強しないと、ダメなんだからな?
……べ…別にお前の心配なんてしてねぇ～からな！！勘違いすんなよ……ばか』

「……え?何この下手なツンデレ…」

……こうか?……いや、もっと…だが・・・これじゃ伝わらない

んじゃ……

……30分後

『しっかりな。油断すんなよ？』

「……これでいいや」

送信！！

追試前日…

「というわけで、澪ちゃん、ケーちゃん助けて！！」

何がというわけだ……

「へ！勉強してきたんじゃないの？」

「……」

「ヒック…グスン……できなかったぁ～」

Ｗａｏ！

「えぇ！！」
「合格点とれなかったら…私たち…」
「それだけは絶対したくない！！」

涙目で必死に訴える唯。しかし……なぁ～…

「ん～……前日だしなぁ～…もうこうなったら…」
「うん…よし！！今晩特訓だ！！」
「ホント！！」

唯の顔から光が取り戻す。まるで俺たちを神さまと崇めそうな目だ。

「兄貴と澪に教えてもらえば、確実に合格点とれるぞ！！」
「いやぁ～／／／」
「そんなことは…なぁ～／／／」

今日の晩御飯は律の好物にしてやろう！！

「上手いんだぜ！！一夜漬け教えるの！！」
「普通に教えるよ！！」

……全品嫌いなものに決定…

俺たちはさっそく唯の自宅で勉強することとなった。
なんでも唯父は出張でいなく、唯母もその付添でいないとのこと。

「あれ？でも妹がいるって言ってなかった？」
「うん、妹は帰ってきてると思う」
「それだとお邪魔にならないかしら？」

唯の妹か……
……あれ？なんか唯が二人いる！！
みんな同じ想像したのだろう。思わず笑みをこぼしてしまった。

「てか…今更だけど男の俺が行ってもいいのか？」
「大丈夫！！ケーちゃんは私の友達だもん。だから全然大丈夫だよ！」
友達か…嬉しいこと言ってくれるじゃん！！

そして平沢家到着！！

「みんな、上がって上がって」
「「「「お邪魔しま～す」」」」

家に入ると玄関は掃除されていて綺麗だった。靴もきちんと並べられている。
失礼かもしれんが、唯の家だからもっと靴とか散らかってるイメージがあったから、イメージの違いに少なからず驚きだった。

『あ！お姉ちゃん、お帰り』

すると奥から唯の妹さんらしき人物の声が聞こえてきた。

「あれ？お友達？」

……唯の妹だよね？

「初めまして、妹の憂です。姉がお世話になってまぁ～す」

……あれぇ～？？妹？？なの？

すると即座にスリッパを取り出し、俺たち来客分のスリッパを並べる。

「スリッパをどうぞ」

（（（（出来た子だぁ～））））

この時俺たちはシンクロ率が１００％だった。

「……アッ」

「ん？」

俺がスリッパをはこうとしたとき、一瞬だけ妹さん…憂ちゃんと目が合った。すると、何かに気づいたように小さく声を上げた。

「……」

「……（汗）」

何やらじ～っと見られてるんだが……あ、そうか…

「ん？どうしたの？憂？」
「あ、お姉ちゃん！」
「あぁ！もしかして『この人、女の子なのにどうして男の制服着てるんだろぉ～』って思ったんでしょ！？」
「え！？」
「うんうん、わかる。わかるよ。憂！！私もケーちゃんは女の子に見えたもん！！」

いや、いくらなんでも男の制服着てたら女には見えんだろ…

「唯、たぶん男の俺がいることに違和感があるんだよ」
「え！！そうなの！！憂！」
「えっと…私は…」
「やっぱ、俺は帰ろうか？」

いくら友達でも女の子の家に上がるのは…

「そんな！！帰らないでください！！」
「え？」
「憂？」

俺が帰ろうとしたとき、意外にも引き留めたのは憂ちゃんだった。

「お姉ちゃんのお友達なら大歓迎です！」

「いやぁ～姉妹でこうも違うもんかねぇ～」
「え？何が？」

あの後、結局俺は唯の部屋に招かれた。

「妹さんに、唯のいいところ全部吸い取られたんじゃないの？」
「ヒド～イ！！」
「律も慶にいいところ全部吸い取られてると思う」
「ヒドいぞ！！澪！」

“コンコン”

「あの～、よかったらみなさんお茶どうぞ。買い置きのお菓子で、申し訳ないんですけど…」

（（（（本当にできた子だぁ～））））

ホントに吸い取られてる気がする。

「憂ちゃんは今何年生？」
「中３です」

ほう～一つ下か。

「受験生ですね」
「どこ受けるか、もう決めてる？」
「んん～…できたら、桜ヶ丘に行きたいんですけど……私の学力で

受かるかどうか…」
「お姉ちゃんでも受かったんだから、大丈夫だよ」
「おいで、おいでぇ～♪」
……そうだよなぁ～唯や律でも受かったんだから、大丈夫だろう。
憂ちゃんは勉強できそうだし…
……てか…なんで男子は俺だけしか受からないんだ??
「お姉ちゃんに勉強教えてもらえばいいんじゃない?」
「はは、それはいいんじゃないか?律も俺から勉強教わってたしな」
俺と澪の一言で唯は自信ありげに頷く。すると憂ちゃんはちょっと困った風な表情となり…
「それは……自分でできるから…」
と言って目をそらすのであった。
「あはは～。断れたぞぉ～」
「えぇ～!!なんでなんでぇ～」
そりゃぁ～…ねぇ～
「で…でも!お姉ちゃんはやるときはやる人です!!」
「いやぁ～///」
(((((やっぱりできた子だぁ～)))))
こんな妹が存在するとは……ってまただ。今度はチラチラと俺を見てくる憂ちゃん。

「あの…俺の顔になんかついてる？」
「え！？えっと…その……し！失礼します！！」
憂ちゃんは逃げ出した。
は〇れメタルのごとし！！！
「慶…何したんだ？」
何したって言われても…
「きっとケーくんが女の子みたいだからよぉ～」
「「「「あぁ～なるほど」」」」
おいおい

「俺は取り敢えず、予想問題作ってるから…澪と紬で唯の勉強見といてくれ」
「うん。わかった」
「任せて、ケーくん」

「唯。机借りていいか？」
「いいよぉ～」

それじゃ～、始めますかね～。

「えっと……こうで……ここが重要……」
『ふぁぁ～～～～……』
「……ここもだなぁ～」
『あ、漫画ある』
「……」
『あはははぁ～』
「……」
『兄貴、兄貴！この漫画面白いよ！！』
「……おい」

まだ１０分しかたってないのに……うちの妹は…

「はぁ～…唯、トイレ借りていいか？」
「うん、いいよぉ～。階段下りて右だよぉ～」

俺は唯の部屋をでて階段を下りる。もちろん、律への制裁は忘れていない。澪の拳骨と俺のデコピンを食らって大人しくなったはず。

「あッ…」
「おっと…」

俺がトイレに入ろうとしたとき、（おそらく）リビングから出てきた憂ちゃんと遭遇。
さて、どうしよ～…

1、　ニッコリスマイル
2、　唯に似てかわいいね
3、　俺の妹にならないか？
4、　以前どこかであったかな？
5、　無言

いや、どう考えてもこの中だと1しかないだろ……2は辛うじてセーフだけど…3は完全にセクハラだろ…4は何のドラマですか…5は論外…

「あ…あの！」
「以前どこかであったかな？」
「え！？」

おいいいいい！！何で4！！なぜ4！！俺はどこか心の中でドラマ的展開を望んでのか！！！憂ちゃん引いてるやん！！
早く弁解せな！！

「今のはジョー…」
「やっぱり、あったことありますよね！！」
「……へ？」
「よかったぁ～。ずっと気になってたんです」
「えっと……？」
「確か…去年の夏ですよね？もう元気なりましたか？」

去年の夏？一体なんこと…

「あれ？違いました？すごい夕立が来た日だったと思うんですけど…日にちは…8月20日です！！」

「なッ！！」
「私、あの後すごい印象に残ってて、よく覚えてるんです！！」
……8月20日……俺と律の誕生日前日の日だな……まさか！！
「そっか……君が…あのときの……」
「はい！そうですよ！すごいです。まるでドラマみたいな再会ですね！」
「……ホントだね……」
本当にドラマ的な展開だな…あの時の女の子が唯の妹だったとは……
8月20日……それは俺の前世での誕生日……でもあり……

俺の死んだ日……

そして

俺の前世の記憶がこの日だけ完全に蘇る日

俺が……絶望する日

拝啓～前世の家族へ～

・・・・・・・・・・・・・・。

十二話（！×１０）＋！！（後書き）

十三話（！×１０）＋！！！（前書き）

三人天女の最後の一人が登場

十三話（！×１０）＋！！！

『私、あの後すごい気になってたんです…慶さん…すごく悲しそうな目をしてたから…』

まさかあのお人よし女の子が唯の妹とは……

いやなとこ見られたなぁ～……

「ケーくん、お茶のおかわりいかがかしら？」

「あ、いただきます」

８月２０日……俺の前世の誕生日にして、前世の命日。

何故だがわからないが、その日限定で俺の前世の記憶が鮮明に脳裏に映し出される。

そうなると俺はテンション最低になり、ひどく落ち込む。『俺…なんで生きてんだろ…』『あいつら…元気なのかな…』『…死のう』てな感じで。厄介極まりないのだ。

更にその次の日が俺と律の誕生日なのことも、厄介さを増幅させている。律は誕生日前日ということもあり、かなりテンションが高い。

それに比べて俺はテンション最低。

律、テンション最高

←

兄・慶の姿見る。

←

テンションあげようとする

←

慶、それに乗れず冷たく突き放す

←

律、泣く。親、慶を怒る
←
慶、『…黙ってろ』っと言って家を出るか、部屋にこもる
←
親と律。超心配する。
←
翌日、慶、『やっちまったぁ～』っと後悔する。

てな感じだ。

「去年は格別にひどかったなぁ～……って？」

なんか、俺の太ももが温かい？もとい、熱い。

「あっちぃいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！」
「はっ！！ごめんなさい！！ケーくん！！」

俺はあまりの熱さに飛び上がってしまった。

「ご…ごめんなさい！！ボ～っとしてて！！」

どうやら紬がさっきからずっと俺のカップに紅茶を注いでたらしい
…カップから紅茶がドバドバとこぼれている。
てか……

「お前らソワソワしすぎ！！ちょっとは落ち着け！！」

今日は唯の追試の返却日。みんな唯の結果が気になって仕方ないご様子だ。

「で…でも…」
「軽音部の存亡がかかってるし…」
「いや、分かるけどよ……少しは信用しようぜ。唯なら大丈夫だ」
「ん……」
「……」
「……」“ボ〜〜”

この子たちは……まぁ〜俺も心配ないとは言い切れないけど……

“ガチャ”

「お？」
「「唯！」」
「唯ちゃん！！」

噂をすればなんとやら……

「ど…どうだった！！」
「だから、澪…落ち着けって……」

もっと冷静に聞いてあげなきゃ唯もビビっちゃうだろ？

「で？どうだったんだ？」
「……」
「お……おい、唯？」
「ケーちゃん…澪ちゃん……」

あれ？なにこの雰囲気？

「ど……どうしよう…」

「マジ？」
「え！ダメだった！？」
おいおい、マジか…マジでダメだったのか！！
「百点取っちゃった…」
（（極端な子ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！））

数日後……
唯の追試事件が解決してしばらくたった。7月も半ばに入り、いよいよ夏本番の季節って感じだ。……暑い。
「あっち～～……さっさと水分採らんとミイラになりかねん……」
俺は部活に行く前に自販に寄っていた。
夏といえばやっぱコーラでしょ！！
俺は自販に金を入れ、コーラのボタンを……
「ご苦労“ピッ”」
「……へ？」
突如、俺の後ろから手が出てきてコーラの隣のアク〇リのボタンが押された。

「なッ！！」
「いやぁ～、生徒にジュースを奢ってもらえるなんて、先生感激だなぁ～」
「何すんですか！！海原先生！！」
俺の後ろにいたのは、桜ヶ丘の『三人天女』の一人。海原　乙姫先生だ。
「うるさい黙れ。……ゴクッ……ゴクッ……」
「ってもう飲んでるし！！」
「っぷはぁ～」
「……」
『ぷはぁ～』っじゃねぇ～よ！！もう小銭残ってないんだぞ！！
「ん？なんだ田井中。私の飲みかけがそんなに飲みたいのか？」
誰が飲むか、くそ教師……
「ぐはッ！」
「誰がくそ教師だ」
「何も……言ってない…」
「顔に書いてあった」
訂正！！この不良鬼暴力教師！！みぞおちを本気で殴る！？ふつう！！
つうかなんでこの先生が「三人天女」に選ばれてんの！！クールでお姉さま的でかなり美人だけど、本性はただの暴力女ですよ！！
「なんでも生徒は私に叩かれたいらしいぞ？」

「だから俺は何も言ってないって言ってるでしょ！！」
「だからお前の顔に書いてあるんだって」
つうか叩かれたいってなんだよ…『お姉さまぁ～私をたたいてぇ～』的なノリか！？おい！
「先生！俺は叩かれたくないです！いえ、殴られたくないです！！」
「ところで、田井中よ」
聞いてねぇ～！！
「平沢の追試の勉強、お前が教えたと聞いたのだが本当か？」
「え？えぇ～そうですけど…」
「チッ…もっと難しくすればよかった…」
どういう意味だ？
「あの……」
「せっかく男子生徒を入学させないように、入試の数学の問題は海星高校以上の問題にしたのに……男子の問題だけ」
「男子生徒が俺しかいないのアンタのせいか！！！」
「ぁ……聞かれたか？」
「聞こえるように言ったでしょ！！」
海星高校って言ったら全国最高に頭のいい高校じゃないかよ！！どうりで超難しいと思ったよ！！
「難しいと言っておきながら、貴様は数学の点数満点だったろ」
「い…いや～／／／」
「だから私の計画を邪魔したお前が嫌いなのだ」

あなたが俺にしてきた数々の嫌がれせはそういう事だったのかよ！！

「その通りだ」

「自信満々に言わないでください……」

はぁ～……

「でもなぁ～田井中……」

「何ですか？」

「お前が女の子になれば、許してやるぞ？」

あれ？？俺が悪いの？？

俺は海原先生と別れ、部室に向っていた。

「結局、金払ってくんなかったし……」

おかげでピン札の千円札を崩す羽目になったし……

「……なんか疲れちった」

早く部室に行って紬が持ってきたお菓子を食べなければ！！

スイーツが俺を呼んでるぜ！！
俺は勢いよく部室のドアを開けた。

「合宿をします！！」
そして澪に勢いよく宣言されました。

拝啓～前世の家族へ～
三人天女が全員出ました！！

十四話（！×１０）！！！！（前書き）

お久しぶりです。

「なんとか完結させたい」とか言ってたのに、、、どうやら自分は口だけの輩でした。。。。しかも全体を通してもすごい駄文。すいません……

そんなどうしようない私ですが、なんとかやれるだけやってみようと思い、投稿しました。。。

お手柔らかにお願いします。

十四話（！×１０）！！！！

夏といえばなんだろうか……

海

山

お祭り

花火

スイカ

肝試し

バーベキュー

Ｅｔｃ…

俺が挙げるとしたら……

俺は……

「泳ぐぞぉ〜〜！！」

「おぉ〜〜！！」

「おーい！！あんまりハメはずしすぎるなよぉ〜！！」

「ふふ、二人とも楽しそう」
「唯！水がしょっぱいぞ！！」
「塩！塩だよ！！りっちゃん！！」
「…聞いちゃいねぇ～……もぉ～慶からも言ってくれよ…ん？慶？」
俺は！！
「／／／……そ…そんなに真剣に見つめないでくれ…恥ずかしい／／／」
「わ…私も……ちょっと恥ずかしいです／／／」
俺は自信を持って水着美少女と答えよう！！！

……夏休み前
「合宿をします！！」
俺が入室早々に澪が宣言した。
「あ。兄貴」
「ケーちゃんだ！」
「あ、慶」

あれ？紬がいないな…

「うっす。何の話？……」
「兄貴！！海か山どっちがいい！！」
「え？…まぁ～海かな」
「よぉ～し！海に決定！！」
「わぁ～い！！」
「遊びに行くんじゃありません！！」

相変わらず元気だな。律と唯は。おっさんは微笑ましいよ。んで？何の話？

「バンドの強化合宿！！朝から晩までみっちり練習するの！！」
「着ていく服買わなきゃ！！」
「水着も買わなきゃなぁ～」
「聞けぇ～～！！」

「夏休みが終わったらもうすぐ学園祭でしょ！！」
「学園祭…」
「なるほど…学園祭か…」

澪が言わんとしてることがわかってきた。桜高の学園祭でのライブのことだろう。

「そう、桜高祭の軽音部のライブといえば、昔は結構有名だったん

だぞ」

ほら！！当たった！！もうアレだ！！俺たちはすでに以心伝心だ！！

「確かにライブをやるとなると、この時期からすでに合わせはじめないと間に合わないな…」

「そう！！慶の言うとおり！！それなのに…」

「学園祭…」

「高校の学園祭ってすごいんでしょ！？」

「模擬店！」

「焼きそば！」

「たこ焼き！」

律と唯が何やらヒートアップしてる。お互い、学園祭をイメージしてテンションが上がってるんだろう。……最近、たこ焼き食ってないな

「はいはぁ～い！私メイド喫茶がやりたい！！」

「えぇ～！お化け屋敷がいいよぉ～！！」

「むッ！メイド喫茶！！」

「お化け屋敷！！」

「メイド喫茶！！」

「お化け屋敷！！」

おいおい、お前等…メイド喫茶もお化け屋敷もどっちでもいいけど、とりあえず澪を表情を見なさい。……あぁ～その今にもブチ切れそうな顔も可愛いｗｗｗ

“ゴツンッ”

「なんであたしだけぇ〜…」

「私たちは軽音部でしょ！ライブやるの！」

懲りないな。妹よ……

それにしても、澪はなんでいきなり学園祭のことを気にし始めたんだ？朝は別に普通だったのに……

“ガチャッ”

「ごめんなさい、遅れちゃって…」

そこで紬さん登場！！

「ん？」

そして、この状況を見て固まる紬さん。

「……マドレーヌ…食べる？」

「食べます！！」

「ムギはどう思う？私たち、もう3か月になるのにまだ一回も合わせたことがないんだよ」
「まぁまぁまぁまぁまぁまぁまぁ」
「慶は合わせないと間に合わないって……ねぇ！慶！」
「ん？まぁねぇ」

今何回「まぁ」って言ったんだ？

「……六回」

唯…数えたのね。

「ぜひ、行きましょう！！私、みんなでお泊り行くの夢だったの」
「じゃどこにする！！海にする？山にする？ちなみにあたし達は海なんだ！！」
「だから！！バンドの強化合宿って言ってるだろ！！」

紬の賛成意見に喜ぶ律。正直、俺も律ほどではないが心躍る気分だ。しかし、……

「んで、澪。合宿なんてどこでやるんだ？？」
「え？」
「それにお金の問題もあるしな。俺たち高校生の財政状況はあまりよくないぞ？」
「うぅ～…」
「大丈夫！！お金のことは兄貴がなんとか…
「しません」

「えぇ～～！！どうして！！」

どうしてって・・・お前ねぇ～。

「あたし知ってるぞ！兄貴の貯金箱の中にはすっごい大金が…」

「今すぐ黙らんとデコピンな？」

「ごめんなさい」

こいつは…まったく。

「話が途切れたな。んで、どうする澪？」

「そ……それは……」

困った顔をする澪。うん。そんな顔もまた可愛い。気を引き締めないとニヤけてしまうな。

「ケーちゃん。どうしてニヤけてるの？」

「……ニヤけてません」

たまにすごい鋭いよな。唯は……

……ニヤけてたか？

「ム…ムギ……」

「はい？」

「別荘とか……」

「いや、さすがに……」

「ありますよ」

（（（（あるんかい！！））））

拝啓～前世の家族へ～

田井中家も別荘欲しいです！！

十四話（！×１０）！！！！（後書き）

……お手柔らかにお願いします……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2091t/

律の兄貴やってます　～拝啓、前世の家族へ～

2011年12月28日03時45分発行